

魔法少女たちと規格外な男

ゼロ・アース・コア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語の主人公、時野 戦はとある大事故に巻き込まれ死んだ、しかし何故か女神様によって別の世界に転生させられることに。転生する世界は自分で選べるとのこと、そこで戦は『魔法少女リリカルなのは』の世界を選択。転生した世界で時野 戦はどうなっていくのか、何をするのか、それは誰にも分からない。

この物語は主人公『時野 戦』のもうひとつの可能性の物語です。ぶっちゃけ作者の妄想の一つです。なので、作者が書いてるもうひとつの小説『歌姫たちと歌えない戦士の物語』で書いた主人公の過去はこちらでは書きません。そちらに主人公の過去を書いた回があるので、それだけでも読んでもらえれば分かりやすいかもしれない（楽しんでください）

これからちよいちよ挿し絵を入れていくことにしましたですが作者の画力はくそなので多目にみてもらえればいいかなあ（願望）《2017/10/2》

#いつものようにリリカルなのはの小説を検索していたところ自分の書いている小説と同じ名前の主人公と似たような設定をした小説がありました。ですがその小説をパクっているわけではありません。作者はリリカルなのはにはまってからこの小説をはじめたので

今日までガチで知りませんでした：(・ω・) できるだけその小説と違いをつけようとは思いますがどれだけできるかわかりません：みたところかなり前から連載をされてるようであちらの作者さんからすればパクっていると思われるかもしれないませんが決してそんなことはありません。信用されるかどうかわかりませんがご理解していただけると嬉しいです。く追記くあちらの小説をよんでみたところ物語は結構違ってみたいなので普通に更新していきます《2017／

9／26》#

目次

始まり

プロローグ | 1

時野戦 ステータス+@ | 9

半年の空白期

第一話 脱出&…… | 12

第二話 出会いは必然 | 18

第三話 話し合いと恐るべき力 | 30

第四話 なんだかんだ平和な日常 | 38

第五話 証拠発見!? 裁判!? え? 囑託魔導師試験……? | 45

第六話 警戒↓そして? | 51

第七話 化け物 | 63

第八話 落ち着けえ!! (ピロロロ) | 78

第九話 車イスの少女 | 84

始まり プロローグ

よう！俺は〇〇県の時野戦（ときのいくさ）だ！と某木曜日アニメの主人公っぽく自分を紹介してみた訳だが…（誰にだよ）

「……だよ!!」

と思わず叫んでしまうくらい真っ白で何もない空間に只今ぼっちでたたずんでいるのだ。

「どうする？このままたたずんでるか、それとも動き回るか………とりあえず動き回ろう」

んで俺は歩き始める。

それにしても何もない空間だなあ…

うう…なんか気持ち悪くなってきた…

『何もなくて気持ち悪い空間とは失礼な!!』

幻聴も聞こえてき…た…？

「誰だあ!!」

と叫び、俺は周りを見渡す……なんだ気のせいかな…

『気のせいじゃないです!!』

「やっぱ気のせいじゃねえ!!」

と転校初日に独り言をヒロインに聞かれて話しかけられても無視するライトノベルの主人公ぼりのポケをかましたところで俺の前に、机と椅子が現れた。

「面接会場かつ!？」

『まあそんな感じではありませんね』

「だから誰だあ!!」

すると目の前が光輝き俺は目の前が真っ暗に…

『なりません!!』

ならず、いかにもそれっぽい白のワンピースをきた少女がいた。

………なんやこいつ、かわいいやんけ

『かつ／＼／かわいいだなんて…／＼／／ってそうじゃなくて!』

俺の発言に照れながら

『私とはある女神です。あなたの担当になりましたので、ここに呼ばせていただきました。』

自己紹介をしてくれた…が女神…だと…!?いや待て、女神だぞ…嘘かもしれないし本当に女神だとしてもろくなやつじゃないんじや…

『ろくなやつですよ!!』

いやだつてさ、神話の女神大体サイコパスかヤンデレじゃん…

『大丈夫です!それは地球の女神がおかしいだけだから!!』

というか…こいつ、直接脳内に…!?

『それは私が作った空間だからです』

だそうだ…

「それなら安心だな」

『そうですよね、信じてくれます…ってええええ!?そんなに簡単に信じちゃっていいんですか!?!』

「人を見る目には自信があるんですよ…この場合は女神様だけど」

それにしてもかわいいな、少女とは言ったがボンツキュボンツな少女だ。人間で言うなら高校生くらいだな

『かつ／＼／かわつ／／／ってそうじゃなくて!!あなたには言わなければならぬ大切なことがあります』

「は…はあ…」

『…あなたは残念ながら死んでしまいました』

「そうですか」

『そうですつてええええ!?なんかこう…驚いたりしないんですか?つてか驚いてください!!』

「ん?なんか女神様オーラの的なのが薄くなったな」

このオーラが薄くなつた女神様もいいな、やべつなんか襲いたくなつてきた…

『く／＼／だからそういうの辞めてください!!話が進みません!!』

「分かりました、できるだけ押さええます」

というわけで女神様いじりもこのくらいにして話を聞こう

『こ、こほん…では改めてあなたは残念ながら死んでしまいました』
「うん」

『そして理由はいろいろとありますがあなたが別の世界に転生させる
ことになりました』

「別の世界…：つてあれか？このすばみたいな」

『まあそんな感じですけど別に魔王を倒す的な世界じゃなくて選べる
んですけどね』

「選べる…とは？」

『アニメの世界や死ぬ前にいた世界の平行世界とかですね』

アニメかあ…

『では考える時間をあげま「魔法少女リリカルなのはの世界でお願い
します」決めるのはやあ!?!…：わ、分かりましたではなゼリリカルな
のはの世界に？」』

「まあまずハーレムの的なのを目指したいのと助けたいと思ったキャラ
がいますて…」

『はいわかりました、やはりあなたを選んで正解でした』

…：…？…俺を選んで正解？

『はい、人間を新しく転生させるには神の法律として悪人を転生させ
るわけにはいかないんです』

「まあ当たり前だな」

『それで選ぶ時から死んだ人の魂に刻まれた記憶を見て、ある程度善
人であればここに呼び出して、いろいろ説明して最終確認するん
です。ハーレムを目指してはいますが助けたい人がいると本心から
言っていたのであなたは合格です』

「は、はあ…」

…：…？…うーん…

『あなたの想像通り…特典を3つだけ選べるのですがどんなものか
いいますか？』

…：…？…うーん…

「まずサイヤ人の肉体がいいです」

『やっぱりそうですか、では髪型は？』

「それ二つ目の特典とかにならないですよね」

『なりませんよさすがにそこまでけちじやないですよ』

よかった…

「じゃあ…少年悟飯の髪型で」

『あなたはサイヤ人の肉体としか言っていないので純粋なサイヤ人の肉体になるので髪型は成長してもほぼ変わりませんがよろしいですか?』

「はいそれでお願いします、もうひとつはやっぱりオリジナルデバイスですね」

『そうですか、では私があなたに言われた通りに作りますので性能や変身したときの容姿とかを教えてください』

…リリカルなのはの世界だ、これはよく考えてなければ…

というわけで…三分後…

「質問です、デバイスは2個つくって貰うことはできるのでしようか、出来るのであればその場合2個目は3つ目の特典になるんですか?」

『3つ目の特典にはなりませんよ、私たちは悪いことに特典を利用しない善人しか転生させませんのでそこまで心配しなくても大丈夫ですよ、ですがデバイスを複数作るのなら3つが限度です。なので大丈夫ですよ』

…なら

「じゃあ!一つ目のデバイスの名前は『サンダーソウル』で変身したときの服はゴクウブラックの黒いインナーを白くしただけの服装で、能力としてはその名の通り雷を操る。デバイスの形としては剣でモンハンのリオレウスの大剣の刃のトゲの部分をなくしてスリムにして大きさを刀身70センチ、持ち手の部分を25センチにした形に、そして変身していないときはそのままアクセサリーぐらいにちいさくしてほしいです!!」

『こんな感じですか?』

「そうです!!それです!!」

妙に興奮しているが簡単に言う俺の男の浪漫が反応しているのだ

『では変身してみてください』

「おうっ!!サンダーソウル:セットアップ!!」

俺がそう叫ぶと、俺の体が光り出した。

そして光がおさまると俺はゴクウブラツクの黒いインナーだけを白くした服装になり、左手には日本刀レベルにまで小さくなり色が黄色になって俺の望んだ剣が握られていた。さらに肉体が12歳の時の悟飯の容姿になっていた。

「ふははは、素晴らしい…これこそが神の恵の究極…!」

『確かに神の恵ですがゴクウブラツクさんのモノマネはやめてあげて下さい。彼、一応この世界にも居まして自分の過去が地球でアニメになっていて他の神様たちにいじられて引きこもってしまったんです。今はでてきていますが…』

「え?でもそれなら消されたんじゃ…」

『はい、確かに消されましたが消滅というのは実は魂だけを虚無空間に飛ばされることなのです』

「ゴクウブラツク:虚無ってたのか:でもそれならなんでゴクウブラツク単体?」

そうだ真つ二つに斬られたとは言え神様同士のポタラ合体なら二度ともとは戻れないはず

『そこはとある神様が肉体が悟空のため、冷静に物事を判断できるゴクウブラツクのみを虚無空間から引っ張りあげたのです。そしてそこから様々なことを経験させたらしくて、今はよっぽどのがなければ人間に手は出さなくなってます』

あのゴクウブラツクが善神に!?

『まあそんなことは置いといてもうひとつのデバイスはどうするの?』

やべっ!!そうだった

「二つ目のデバイスは………」

〜五分後〜

(・ω・)(ムフー

『すごい興奮してましたね、気持ちわかりますけど…』

「すみません、俺の浪漫が反応してたので…」

一応死ぬ前はまだ16歳だったのだ…まだ思春期じゃあ!!

『では最後の特典はどうしますか?』

…うーん…特にないしなあ…

「…そうだ!3つ目の特典は悟空に修行をつけて貰うことだ!!」

『それでいいのですか?それだと特典を持っていきませんが…』

「いいんですよ、てか実質3つですし」

『わかりました。では呼んできますね』

〜三分後〜

「オツス!オラ悟空!!おめえがおらに修行をつけて貰いたいってやつかあ?」

本物の孫悟空…

「ああ!俺は時野戦だ!!よろしく!!」

俺は悟空に向けて手を出す

「ああ!よろしくな!!」

悟空は俺の手をとり、握手をしてくれた

「事情は女神様から聞いてっぞおらと互角になるくらい強くしてやつぞ!…それにしてもおめえ昔の悟飯に似てんなあ」

「まあ俺ももうサイヤ人ですしサイヤ人は同じような容姿のやつが多
いんだろ?」

「そーいやあベジータも言ってたしおらにそっくりなやつもいたなあ
…まあいいやさあ行こうぜ!イクサ!!」

『どこに?』

『精神と時の部屋みたいなのを作りましたのでそこで修行してください
』

「わかりました」

『ちなみにあの悟空さんはGT後の悟空さんです』

「まじで!?!」

「おーい!イクサー!速く始めようぜー!!」

「つとやべっ!行ってくる」

『いつてらっしやい』

そして俺は悟空とともに精神と時の部屋もどきにはいる

〜2日後〜

「いやあ〜…おめえがすげえなあたたった二年でここまで強くなるなんてよ最初は弱すぎてどうなるかと思っただぞ」

俺の体感時間では二年が経ち俺は肉体的には14歳になっていた。ちなみに通常状態でセル編超サイヤ人2の悟飯くらいの強さになっている。

「まあこれならあとは転生した先で修行を続ければもっと強くなれるから頑張れよ〜じゃあなイクサ」

「ああありがとう悟空さん」

オレがそう言うとき悟空さんは瞬間移動で帰っていった…：…つてあれえ!?!ここ女神様が作った世界だよね!?!なんでそれで帰れるんだよ!?!

『彼はもはや神すらも越えた存在ですからね、最も彼にとっては神と人間とは関係ないですし』

「あ、女神様」

振り向くと女神様がこつちに歩いて来ていた。

『特典のことも終わったのでそろそろ転生させますね』

「ああ!頼むぜ女神様!!」

『あちらではすでに戸籍と自宅を作っています、自宅に戻りたいと願いながら瞬間移動をするとどこからでも自宅に行けますので』

「ここまでしてくれてありがとうございます」

俺は心から女神様に感謝を伝えた

『いえいえ、それはあなたが善い人だからですよ。では、転生後の場所はランダムですが転生をさせますので』

と女神様が言うとき俺の足元に魔法陣的なものが展開される

『ではあなたが二度目の人生に幸せがありますように…』

俺は壮絶な光に包まれた

光がおさまると俺は

「じゃあ!!これが俺の新しいはじめ…え?あああああ!!」

真つ逆さまに落ちていた…そしてそうここは…

「いきなり虚数空間スタートかよおおおおおおお
おおおおお………!!!」

時野戦 ステータス十@

時野 戦

身長：162cm 体重：55kg 年齢：14

容姿：ちよつと成長した少年悟飯

服装：魔族の服のしたに黒い長袖のインナーを着ただけ

黄色いマフラーをいつもつけている

デバイス

サンダーソウル

その名の通り雷を操るデバイス。変身後の服装はゴクウブラックの黒いインナーを白くしただけの服装。武器はプロローグで説明した通りの剣。技はいろいろ、ブレイカーは一点集中型。

画像はイメージです

二つ目のデバイス

初登場回で説明予定

“気”

もうドラゴンボールのやつそのままである。

超サイヤ人

容姿が悟飯なので悟飯の髪型。悟空との修行により修行後の超サイヤ人の強さと冷静さを獲得。わりと登場する。

超サイヤ人2

現時点ではここまでしかなれない。つまり最強の姿。登場するのは超サイヤ人よりはすくない。

技

悟空に教わった技を改良、応用して作ったオリジナル技。結構数が多い。

魔力量

すっげー多い簡単に言うとなのはやフェイトの三倍（訳あり）

自宅

結構広い。精神と時の部屋擬き付き（2日しか入れない制限をなくし、歳をとらなくなつた）　ちなみに一人暮らし（物語が進むと住民が増える）

料理の腕

女性のプライド的なものに傷つけるくらいの腕。レストランか居酒屋を経営するとかかなり儲かるレベル。元々前世でも一人暮らしだったため、安物でそうとうなものを作るので大量に作る事が可能。悟空曰くうめえなこれ。太鼓判をもらった。

メンタルの強さ

そこまで強い訳ではないが肉体年齢的に見るとそうとうおかしい（強すぎる的な意味で）

大切な人や物を傷つけられると普通に怒る。

悲しいことがあれば普通に泣く。

もうひとつの可能性

この物語の時野　戦は時野　戦という人間がたどる二つに枝分かれした可能性その一つ。細かく見ていけばその二つの可能性のからさらに無数に枝分かれした可能性があるがほとんど誤差の範囲。最終的にどちらの可能性もそれぞれの一つの未来に進むため。

戦の過去

基本的には作者が書いてるもうひとつの小説の戦と同じ、違っているとところと言えば事故に巻き込まれたのが速かったか、人を助けたか助けなかったか程度。その時の戦の心情はどちらの可能性も人生に疲れていて死にたいと思っていた。

オリジナルキャラクター

この物語は時野　戦だけの物語のため、もうひとつの可能性のように前世の幼なじみは出てこない（というか出すと後が面倒）つまりオリジナルキャラクターは主人公の時野　戦と敵のみ。ようするに最初だけぼっち（作者含めたぼっちたち特効）作者「ごはあ!!」↑自爆物語の行方

できるだけハッピーエンドにするつもりです。というかします。
そうでなければ作者のメンタルが持たない。

半年の空白期 第一話 脱出&……………

イクサSIDE

「さて…どうするか…」

俺は時野戦は絶賛落下中であります

…いや!?ほんまどうせえゆるねん!?虚数空間スタートって運が悪すぎるだろ!!女神様ー!!おーい返事してくれー!!!…

……………

そうだったあ!転生後は干渉出来ないって言ってたああああ!!

…まあ落ち着け俺、まだ方法はあるはずだ。ここが本当にリリカルなのは世界の虚数空間なら魔法は使えないはずだ:サンダーソウル?行けるか?

『無理です』

うん!やつぱそうだよね!!…なら“気”は使えるかな…?

俺は全身に力を入れる。

「はああああああ!!」

すると全身から白の半透明なオーラが出てくる

「よし使え…って飛べねえええええ!!」

『どうやらここはどうかあがいても落ち続ける空間のようです、まる』

そうか…つかどうした確かに文章の最後にまるをつけるのは常識だがしやべるのに“まる”までは発声しないでいいだろ

『私は半分諦めていますので…』

おiiiiiiiiiiii!!なんで諦めちゃってんの?お前、俺のデバイスだよね!?そんな卑屈な考えやめろよ!!

「…ん?おいあれって…」

俺が今落ちている方向に二つの細長い黒い影が見えた

『マスター、あの二つの影の片方に微弱ですか生命反応があります』

「微弱な生命反応…?二つ…?ま、まさか!あの二人が落ちた直後!?

なんつー時間に飛ばしてくれてんだよ女神様はよお!!」

『どうなさいますか?あの二人はあなたが助けたいい人ですよね』

まあ丁度いいや、あとのことが面倒だが気にしてちゃあ、助けられるもんも助けられんしな!!

『では空気抵抗をなくして加速してください、この空間は魔法などが使えませんが落ちるということに関しては物理法則に沿っているので大丈夫です』

おう!わかった!!

そして俺は加速する

プレシア・テストロツサSIDE

…ああ…これでアルハザードへ行ける…

「アリシア…」

そして私が目をつぶろうとしたとき…

「なに死にそうな顔してんだああああ!!」

「な、なに!?!」

イクサSIDE

「なに死にそうな顔してんだああああ!!」

「な、なに!?!」

よかったまだ生きてたあ…よしとりあえずここから脱出するか!

「俺の手を取れ!お姉さん!!」

「何をする気!?私はアリシアとアルハザードへと向かうの!!邪魔をするな!!というかもうお姉さんなどと言われる歳ではない!!」

くっそ…やっぱ止まれなくなってるのか…

それなら一か八かここで…

「ちよつと!?!アリシアに何をする気!?そんなことゆるさな…かつ!」

と叫びすぎたのかプレシアは吐血する

「無茶すんなー!そこで黙って見ていろー!はあ!!」

パリンと音を立ててアリシアが入っているカプセル的なものを俺は壊す

「だ…だからなに…を…」

プレシアは苦しそうにしながらも俺を止めるためにあぐ
「だから黙って見ている!!」

そして俺はアリシアの腕を掴み、

「くっ…はああああああ!!」

アリシアに “気” をおくる

「ぐ…あ…つく、くそっさすがにだいぶ持っていられるか」

するとアリシアが光輝きだす

「い、いつたいなに…を…?」

光がおさまると俺はアリシアを持ってきた大きい布で覆う

「よし…成功だ…」

「あなた…アリシアになにを…」

「見ればわかるさ」

と言って俺はプレシアにアリシアの方に目を向かせる

「見ればわかるって…」

「…………ん…お、お母…さん…?」

「ア、アリ…シアなの…?」

「うん! そうだよお母さん!!」

「ああ…よかった…アリシア!…アリシア!…」

といいアリシアはプレシアに抱きつく

感動の再開…だなあ… (涙)

「…でもなんであなたはアリシアを生き返らせれたの?」

つと感動してる場合じゃなかった…感動のシーンだが俺らは今、落
下しているのを忘れてはならない

「説明はあとでします、とりあえず俺に掴まって下さい!」

「…あなたはものすごく怪しいけれど、アリシアを助けてくれた…信
用を上げてあげるわ…アリシアが生き返った以上アルハザードに向か
う必要は無くなったからね…この空間から出ることが先決…あなた
にはここから出る方法があるのでしよう…?」

素晴らしいながらプレシアはアリシアを抱いたまま俺の手を掴む

「そっか…そんじゃ行くぞ」

俺は指先二本を額にあて、瞬間移動する
すると

「いてっ！」

「くっ…！」

俺とプレシアは床に叩きつけられた

「な、なんとか出れたな…大丈夫…夫か？じゃ…なああいい！！」

プレシアは床に叩きつけられたことで凄まじい量の血をはいていた…

「お母さん！お母さん！！ねえ！お兄さん！私を生き返らせた時みたいにお母さんを助けてよ！！」

アリシアが泣きながら叫んでいる

俺としたことが虚数空間から出ることを考えるあまり、瞬間移動後のことを考えていなかった…！！

「くっ…わかった！」

俺はプレシアに手をかざし、アリシアの時と同じようにして“気”をおくる

「お母さん！お母さん！しっかりしてよお…！！」

「ちっ、くそつたれがあ！！」

と俺が全身に力を入れると俺たちは光に包まれた

プレシアSIDE

「…ん…お…あさん！お母さん！！」

「ア、アリシア…？」

「よかったあ…よかったよお…お母さん…」

アリシアは泣きながら私に抱きついてくる…でもなんでアリシアが泣いているの？まさかやつが…すると私が気絶する前の記憶が頭に流れてきた

「あの…すみません…大丈夫…ですか？」

名前も知らない少年が私に聞いてきた

「ええ…大丈夫よ、まさか床に叩きつけられて気絶するとは思わなかったけど」

「すみません…あの空間から出ることしか考えてなくて…」
少年がおずおずと頭を下げて謝ってくる

「…まあ構わないわ、結果的に私たちは助かったんだもの」
そして私は近くにあった鏡で自分の体を見る…

「とりあえず聞きたいのだけど…私はなんで20歳くらいに若返って
いるの?」

そう聞くと少年は少し難しい顔をして…

「それは俺にもわからん」

と答えた。その答えに私は呆れたが目の前にいる少年に対して警
戒をさらに強めた。

そうしていると少年が

「とりあえず、自己紹介とか説明とかしますね」
と言った

イクサSIDE

「とりあえず、自己紹介とか説明とかしますね」

あつぷねー! プレシアさん死なせるところだった! もう少しで俺
のプレシアとアリシア救出大作戦が失敗に終わるところだった…

「ええそれはありがたいわね、私たちのことは何故か知っているみた
いだったし、なんでアリシアを生き返らせれたののかも知りたいか
ら」

と俺が脳内で焦っているとところにプレシアは話しかけてきた

「と、とりあえずお茶だすんでその椅子に座っててください」

俺はお茶を準備しに駆け出す

〜一分後〜

プレシアたちにお茶を出したところで俺は自己紹介を始めた。

「俺は時野戦、14歳、わけあってあの空間に飛ばされました」
「虚数空間に?」

「そこも説明します」

〜説明タイム〜

〜五分後〜

説明を聞いたプレシアは納得と安心がまぎった表情で

「まさか前世の記憶をもったまま転生したなんてね…そんなこと思っても出来ないわよ」

俺が転生者だってこと、転生したら虚数空間にいたこと、

アリシアやプレシアを助けた理由を説明したら警戒が解かれました(緊張した…)。ちなみにアリシアは会話についてこれてなく、プレシアの膝に座って寝ていた。

「それにしても何故アリシアを生き返らせたり私を助けたの?」

「プレシアさんの方はなんで病気も治せて、若返らせることができたのかはわかりませんが…アリシアは魂と朽ちてない肉体がまとまってあつたからです」

「肉体と魂…が?」

「はい、俺がしたのは“気”という生命エネルギーみたいなのを送っただけです。これは人におくることで肉体の回復ができるんです。けどあのときはアリシアの脳はしんでしまっていたので俺のデバイスの力で脳を生き返らせました。そこにアリシアの魂を繋げることでアリシアとして生き返らせることが出来ました。まあ実際、あの空間でやる予定では無かったので結構ギリギリでしたが…」

正直あときは死ぬかと思った

「それだけわかれば結構だわ…私の努力と苦労は一体…」

「ははは…では今後どうします?あなたは犯罪者ですし」

「自首するわ…とアリシアが居なければ言っていたんでしようね…アリシアが心配だから自首しないわ…だからあなたの家にかくまって貰いたいんだけど…」

そうきたか! (歓喜)

「いいですよ、それじゃ家を案内するのでアリシアをつれてきてください」

「ええわかったわ」

ふふ…ここまででは計画通り…あとのこととは知らんが…まあ成り行きでなんとかなるだろ

第二話 出合いは必然

イクサSIDE

どうもーアリシアとプレシア救出大作戦を無事？成功させたイクサでーす！んでいろいろ説明したらかくまってくれと言われたので家を案内して一段落したので晩飯作ってるところなのだが…

「お兄ちゃんまだー？」

「そろそろできるぞー」

この通りアリシアに「お兄ちゃん」と呼ばれている

そのわけは数分まえにさかのぼる

〜数分前〜

「いいですよ、それじゃ家を案内するのでアリシアを連れてきて下さい」

「ええわかったわ」

プレシアはそう返事をするのでアリシアを起こす

「起きなさいアリシア、これから彼に家を案内してもらおうから」

「ん…んう…お母さん？って私もしかして寝ちやってた？」

アリシアは目を擦りながら目を覚ます

「起きたか…よしいくぞ」

「あ…まって!!」

アリシアに止められ俺はふりかえる

「ん？どうした？顔でも洗いたいのか？」

「そう寝起きだからね…ってそうじゃないよ！お兄ちゃんは私たちを救ってくれた…でもそれはなんで？」

まあ子供とはいえ死んでしまっただけからずと魂の状態でプレシアのそばに居たっばいからな…そこらへんは怪しむわな…つかそれならプレシアさん俺への警戒心なくすの速すぎだろ…

「なんでって言われてもなあ…」

「もしかして私たちをなにかの目的に利用するきじやないの？」

いや、本当に子供か？見た目8歳の少女がこれだけの警戒心をだせ

るのはおかしい…まさか!…頭脳は大人で体は子供な探偵なんじゃ
(ry

「それだったら今頃あんたたちは俺のデバイスを通してバインドで拘束されてるはずだ…それに俺はあんたたちを助けたいと思ったから助けただけだ…それ以外に理由はねえよ」

「…ふうくん…」

わあー美少女にガン見されてるー…てかこれ見極められてる!?!…おかしい…こんな警戒心強い美少女はじめてだあ…(二回目)おーいプレシアさーん!あなたの娘さん超怖いんですけど…:…プレシアさんめっちゃ笑顔?!…これまでにないくらいめっちゃ笑顔!?

「じゃあ私たちと家族になつてよ」

「え?そんなのいいにきまつて…ウエツ!?!」

いきなりだあ!家族だとおう!?!ふざけんな!そんなの嬉しいに決まってるじゃん!!

「私たちを本当に救いたいならこのお願いも聞いてくれるよね?」

「……………」

よく考えるんだ…俺にとって…家族とは…ただの大切な存在じゃない…絶対に失いたくない存在だ…二度とあんなのはごめんだ…

「…俺なんかでいいのなら喜んで…」

…それでも俺は家族がほしい

「うん!わかった!いいよねお母さん?」

「ええいいわよ…私たちを救ってくれたこともあるし…なにより家族と聞いてあんなに難しい顔をするのなら本当に優しい子みたいだしね」

「…そうすか…」

俺が言うのもなんだが…プレシアさんすんなり決めたな…

なんて考えているとアリシアが笑顔で

「じゃあ今からイクサさんは私のお兄ちゃんでお兄ちゃんのお母さんは私のお母さんね!!」

これが数分前の出来事である

それから俺はアリシアにお兄ちゃんと呼ばれるようになった…実際こんなことは予想外だしまさか家族になれるだなんておもっても見なかった…おれとしては過去最高に嬉しいくらいだ

「『母さん』箸を出しといってくれる?」

そしてプレシアのことも母さんと呼ぶようになった…というか母さんって呼ばないと反応してくれなくなった…よく考えてみるとプレシアさんってめっちゃ親ばかだよね…

そうじゃないとアリシアを生き返らせようとしてロストロギアになんか手をだすはずがないし…

「出したわよイクサー」

とこんな感じでおれも名前で呼ばれている

「わあ…美味しそう…」

アリシアの笑顔がまぶしいわ

「家族になってくれるなんて言われたらおれとしてはめっちゃ嬉しいからな、機嫌がよすぎていつもよりうまくできた」

「あら、やっぱりそうなのそれならこれから私たちを守ってもらわなくちゃね」

と母さんは笑顔で言葉をかえしてくる

「じゃあ新しい家族の歓迎会として…かんぱーい!!」

アリシアの笑顔を見ながら歓迎会は終了した

ちなみにそのあと母さんに「料理のことを教えなさい…詳しくね」と言われたので「いや、母さんもできるでしょ」とかえすと「よくわからないけど女のプライド的なものが傷ついたわ」とよくわからない顔をして言い返してきたので教えることにした

～翌朝～

「んん…おはよ…」

「ああおはようアリシア…顔でも洗ってきたら?」

「うん…そーする」

と目を擦りながら洗面所へと歩いていった…アリシアはよく寝る

からお眠り大好きさんなのかな？まあいいや

「今日の予定とかあるの？イクサ」

と母さんが聞いてくる

「うーん…今日の予定は服屋さんへ買い物かな？母さんたちもいつまでもそれじゃいやだろ？」

…家族になったとはいえ家は俺の家だ、そう女物の服がないのだ…いま母さんとアリシアが着ている服だって俺のだ

まあどつちも素材がいいからなにをきても問題ないと思うのだが女性であることを忘れてはならない…前世の経験上女性の服をこれでいいだろで済ませるとんでもないことになるのだ…実際それで済ませてしまった俺は前世のお義母さんにしばかれたのだ…それ以来俺は女性のことにはかなり気を使うようになった

「そうね…って言ってもお金はあるの？私たちが生活に困らないくらいの数を買うのならさうとうな額になるけれど…」

「たぶん問題ない…俺をこの世界に飛ばした女神様のお陰でお金を充分にある」

軽く計算しても東京〇カイツリーがたてれるくらいはあるのだ

「それなら大丈夫ね…でも問題は私よ」

「は？…なんでだよ」

なにか問題でも…？

「いまはこんなだけどちよつと前までは悪事を働いていた犯罪者よ…それこそ管理局に見つかりでもすればやっかいよ…その忘れてたっていう顔やめなさい」

「ま、なんとかなるだろ…なんかあれば俺が守るさ」

「嬉しいこと言ってくれるのね…じゃ今日はお願いね」

と言って母さんはリビングを出ていく

「なんつー嬉しそうな顔すんだよ…：…あーあ思い出しちまった…記憶の片隅にでも置いとくか…」

…数時間後…

「お兄ちゃんどう？似合ってる？」

「似合ってるぞアリシア……んーこっちも着てみて」

てな感じで服屋さんで服を選んでいる

母さんの服はすでに購入済みだ、その理由はアリシア「お母さんの服先に買ってお願ひ…」と上目遣いで言われて母さんが鼻血をだしたので治療は俺がしたが…服はほとんど俺に選ばされた…いやなんでよ…いくら慣れてるとはいえ女性の服を選ぶのは男だから下手と思うのだが…母さんいわく「ぐっじよぶ」らしい…いや単純に嬉しいのだがもうちよい自分で選んだ方がいいんじゃないかねえの…？」

「どう？お兄ちゃん？」

「いいじゃんかそれも買うか」

「うんー」

アリシアの笑顔が相変わらずまぶしい…このままではただのシスコンになってしまう…母さんどうした俺の肩なんか掴んで…いやぐっじよぶじゃねえよ

「そんじやそれも着てみてよ」

「うんー」

そのままアリシアは試着室に入る

「さてと…」

『母さん見られてるのわかるか？』

『そうね…でも大丈夫なの？念話なんてして魔力の反応でばれたりしないの？』

『大丈夫さ、魔力は使っていないからばれることはない…使ってるのは前に説明した“気”を使ってる』

そう気を使ってテレパシーができるのだ！

『心の声だだ漏れよ』

『それは気にするな…』

『それでどうするの？見ている人によれば私たちは逃走しなければならなくなるけど…』

そうだなあ…管理局のやつらだと面倒だ

『サンダー・ソウル…気を使ってそこにいるやつをデバイスを持っていくのかとかどんなデバイスなのかとか調べてくれ』

『了解』

とサンダー・ソウルは返事をして首飾り状態のまま解析をはじめた『デバイス所持…デバイス解析…該当あり…所持デバイス…“レイジングハート”』

『なにっ!?!』

と俺たちは表情を変えぬまま念話のなかだけで驚く

『どうするのよ!管理局員じゃない!』

『まあ…ちよつと驚いたな…大丈夫だ…彼女には悪いが利用させてもらおう』

『何か考えでもあるの?』

まあね…

『面倒なことにはなるが問題があるわけじゃない』

『そう…じゃお願いね』

『了解した…』

なのはSIDE

な、なんである人が…!?あのとときあの空間に落ちたはずなのに…それにあの男の人は…一体だれなの?

と、とりあえず写真でもとってみんなに知らせないと…!

『カシヤツ』

よしとれた!こういうときは一旦退くのがいいの!

そして私はデパートの服屋さんから離れる

「はやくつながって…はやく…!」

『もしもーしどうしたの?なのはちゃん?』

「大変なの!説明するよりは見てもらった方がはやいと思うの!」

そうして私はあの写真を送る

『ど、どうしたの?そんなにあわて…て…え?ええええええええええええええ!!』

やっぱりそうなるよね…

『どうしたの!?!エイミイ!?!いきなり叫ん…で……そ、そんな…!彼女はあの空間に落ちたはず…それになんで彼女の娘さんが生きている

の!?!』

リンデイさんが送った写真をみて驚く

『何か母さんまで驚いているん…だ…!?!』

あれ?クロノくんだけ驚き方が少し違う…?

『なのは!彼女らと一緒にいる男は近くにいるか!?!』

「え?い、いないけど」

どうしたんだろう…

『写真に写ってる鏡を見てくれ!彼はなのはが写真をとったことに気づいている!?!』

え!?!

「でも気づいてなんていなかったと思うけど…」

そう言われて私は写真に写ってる鏡を見る

『謎の男は鏡の方をみているだろ!その鏡にはなのはも写ってるんだ!?!』

「ほ、ほんとだ…」

そんな…ばれちゃったっていうの!?!

『こいつはわざわざ鏡をみて俺は気づいているぞということを知らせただ、それに人の視線に気づく時点でそうとうな手練れだ…僕がそつちにいくから待っててくれ!』

「うん!わかったの!」

〜数分後〜

「なのは!」

「クロノくん!!」

私はクロノちゃんと合流した

「やつは!?!どこ!?!」

「まだお店にいるよ!」

「くっこのままじゃ手が出せない…僕が動くからなのは家に帰っててくれ!」

「えっ!?!なら私も…!」

「ダメだ!やつはただの人間じゃない!ここにくるまでに写真を改めてみて気づいたんだ!なのはじゃ危険だ!」

「う、うんわかった…クロノくんも気をつけて」

イクサSIDE

「いやあくっばい買ったな」

俺の手にはでっかい袋が二つ抱えられていた

「これでしばらくは困らないねお兄ちゃん♪」

「だな…よし帰るk…っ!？」

「どうしたの？お兄ちゃん？」

いまのは…

「なんでもない…それと用事を思い出した…ごめん母さん荷物頼む」

「え？ちよまつ」

俺は問答無用で母さんに袋をわたして走り出す

「道は覚えてるよな！先に帰っててくれー!」

プレシアSIDE

はあく全く女性に荷物を持たせるなんて悪い子ね

「アリシア、帰りましょうか」

「えーお兄ちゃんは？」

「大丈夫よちゃんと帰ってくるわ」

あのイクサよ…天変地異でも起こらない限り帰ってくるでしょう

ね（呆れ）

イクサSIDE

俺はデパート近くの森まできていた

ここまですれば大丈夫かな…

「さて…出てきやがれそんな隠しきれてない殺気は振りまくもんじゃないぞ」

すると…

「あなたをこの目でみてからただの手練れじゃないことがわかった、気を抜けば殺られると思ったからね」

と黒いバリアジャケットを着た少年が森の茂みから出てきた

「で管理局がなんのようだ？」

「…いつから気づいていたんだ…殺気を飛ばしたときにはすでに気

づいていた…お前は何者だ」

質問を質問で返すなあ!!と言いたいところだが面倒になるから我慢我慢

「お前が俺らを見つけたときからだ…気配が隠しきれないからな」

「くっ…そんなことはどうでもいい!お前には犯罪者に協力した容疑とロストログア不法所持の疑いがかけられている!いまなら弁明の余地はある!」

うそーん…予想以上に重いことになってるー!?

「プレシア・テストアロツサが何故この世界いるのか…そして彼女の娘が生きているのか…説明してもらおうか!」

面倒になることはわかってたが…クロノ・ハラオウンがでばつてくるとは…はあく仕方ない一時的に“敵対”するしかないか

「いやだと言ったら?」

「強引にでも同行してもらおうか!」

すると俺のまわりに細い線のような魔力をおびたものが現れる

「やべっ!?!くそっ!!」

二種類のバインドの同時発動…!?

「さてもう一度チャンスをやる…説明はあるか?」

「悪いがそれは出来ないな」

「ならここです…」

ちっあまり使いたくなかったが…しゃーねえか

俺は自分のスイッチのようなものを切り替える

「気絶してもらおうか!」

「はあ!!」

そしてすこしだけ気を解放する

するとバインドがバリンと音を立てて壊れる

「なんだと!?!」

「ふいいくまだこんくらいでもいけるか」

「な…なんだいまのは…そのバインドは壊すにしてももう少し時間がかかるはずだ!!それに今のは魔力ではないな!」

まあそうなるわないきなり結構力込めたバインドが簡単に壊され

たんだからな…それもしらない力で

「やはり貴様は危険だ！いまここで捕まえる!!」

「……………そんなことはお前には出来んよガキンチョ」

シユインシユインと音をたてている白い半透明なオーラを放ちながら俺は無慈悲に言い放つ

「ガキンチョ…だと!？」

「俺より年下だろ…なら俺にとつちやガキンチョだよ」

やっぱり肉体に引つ張られるんだなサイヤ人特有の煽りスキル発動してんぞ

「くうっ!舐めるn『ドッ』がっ!？」

「舐めてなどいるかお前のようなやつは面倒なんだな…すぐにけりをつけさせてもらった」

当て身をしてクロノを気絶させた後、俺はオーラを放つのをやめる
「ふう〜…どこにあるかな?」

そしてクロノの所持品をあさはじめめる

「お?あつたあつた」

そうしてクロノの通信機みたいなものを取り出す

「使えるかな?……………おー使えるな」

通信で忠告でもしとくか

「あーあーもしもーし管理局かーい?」

『ちよつとクロノになんてことするのよ!!』

「うおっ!？」

いきなり大声かよ…それにこの声はリンデイさんか

『あなたには弁明の余地があつたはずです!なぜクロノを気絶させる必要があつたのですか!？』

……………この人も親ばかかよ……………

…ちよいと仕掛けてみるか…

「まってまって…落ち着けよ仮にも提督だろ?リンデイ・ハラオウンさん
よ」

『?!?なぜその名前を…』

「さあ…な…まあそんなことはどうでもいい…ここで寝てるクロノ・

ハラオウンはただ気絶させただけさ…安心しろ後遺症とかは残らんようにした」

いやあくもしかしたら後に協力するかも知れないのに怪我させるわけにはいかんしな

『なにが目的…なの?』

「目的…だと?」

『そうよ目的がないのなら彼女たちをただ助けただけと言えよそれですんだのにわざわざクロノを気絶させた…なにか目的があるから気絶させたのでは?』

目的…かあ…あり?なんだっけ?…うーん…

そうだ!母さんのことで利用するつもりだったんだ!

出てきたのがクロノだったから忘れてた…

「目的は…そうだな…プレシア・テストアロツサの罪を軽くするためさ…」

『プレシア・テストアロツサの罪を軽く…ですって!?!』

面倒を減らすために面倒を増やしてんな俺…

なんか悲しくなってきた…

「そうだプレシア・テストアロツサは確かに罪をおかしたがその中の一つは濡れ衣だ…それを払拭したいのさ」

『濡れ衣…?』

「そのへんは俺ら二人とあんたら二人で話しましょうや…エイミィ・リミエツタさんよ」

たぶんこの通信機はアースラの指令部的なところに直接繋がっているっぽいしなたぶんいるだろ

『なっ?!あたしの名前まで!?!』

ほらいた

『…どこで話をするのですか?』

「そんじゃ俺の家で」

『っ!舐めているのですか!?!私は提督です!あなたの住所を管理局の本局に伝えることだってできるのですよ!!』

「…そんなことはできんぞあんたらは…俺はその気になれば管理局本

局くらい簡単に消し去れるんだぞ」

『冗談を…』

それができちゃうんだなあ

「念のために言っておくがクロノ・ハラオウンのバインドをといたとき
の力は俺の全力の100兆分の一だぞ」

『はあ!?ふざけるのもいい加減に…』

「そんじゃこいつがどうなってもいいと」

俺はクロノの腕をつかみを持ち上げる

『クロノ!くっわかったわ要件は!?!』

『艦長!?なんで!?!』

「話がいよいよつは嫌いじゃない…今日から三日後時間は問わん、俺
の家の住所を調べて俺の家に来てくれ…もちろんデバイスとかは
もってくるなよ…そこで全てを話す」

すげーなんだかんだうまくいってるー(汗)

『最後に一つ…あなたは一体…』

「それも…含めて…な」

第三話 話し合いと恐るべき力

イクサSIDE

「すまん…母さん面倒なことになった」

帰宅した俺は夜ご飯のあと事情を説明することになった

「なんとなくわかってたけれど…やっぱりなのね」

「管理局あいてに面倒なことにしないうって無理くね?」

あらゆる可能性を考えた結果、あーなったのだ

「はあ…それでどうなったの?」

母さんは呆れながら聞いてくる

「三日後にうちで話すことになった」

「……………え?ええええええええええええええ!!うちで!?あなたアホなの!?そんなことすれば……………ま、まさか!」

「脅しました☆」

『ゴツ』

「ゲンコツツ!」

「痛い!あれは仕方がなかったんだ!あの状況で逃げるには…ゲンコツやめて!?!痛いから!!めっちゃ痛いから!!愛のこもった拳はめっちゃ痛いから!!」

「はあ…わかったわこれ息子のがんばりだし許してあげる」

呆れられながらも許された俺はそのまま部屋行ってで寝ようとする

「そのとき私はいない方がいいのかな?お兄ちゃん」

アリシアがリビングの扉から入ってきた

「…聞いてたのか?」

「うんだって扉開いてたし…」

あーそーういや扉閉めてなかったな…

「そうしてくれるとありがたいかな」

と俺が少し悲しい顔をしながらいうと

「うんわかったそのときは部屋で遊んでるね!!」

飛びつきりの笑顔でそう言った

う、うわあああ！まぶしいいい！こんなのシスコンになってまうわ
ああああ!!と俺が脳内で遊んでるとアリシアは部屋に戻った

そのあとはそのまま部屋にもどって寝た

そしてその三日間をなんとなくすごした

〜三日後〜

「さあこの日がやって参りました！」

「二実況しなくていいから」

とボケを二人に突っ込まれたところでいつくるのかそわそわして
る三人組

「どうなるのかしら…」

心配する母さん

「大丈夫だよお母さんお兄ちゃんがいるから」

そんな母を励ますアリシア

「それ俺が口実なのか」

信頼されてるのか遊ばれてるのかわからない俺

そんな感じでいつもの家族の会話をしていると

『ピンポーン』

「へあああ!?!」

「そんな声出さなくていいから…」

条件反射ででてしまった悪魔なサイヤ人の悲鳴っぽいのを突っ込
まれたところで俺が玄関の扉を開けると

「どちら様でしょうか」ガチャ

「…リンディ・ハラオウンです」

「…エイミィ・リミエツタです」

すんごい険しい顔で自己紹介した美人二人がいた

「あ…どうも」

〜なんだかんだあってリビング〜

「今回はプレシア・テストロッサさん…あなたのことと時野戦さんのことで話をしにきました」

リビングの机に向かい合って座っている俺たち

「そーゆー堅苦しいのは苦手だ…」

「わかったわ」

やっぱりずいぶん緊張してるなお二人さん、まあ俺が悪いんだが…

「話をはじめると…あんたにはやってもらいたいことがある」

「やってもらいたいこと？」

「あんたらも先の事件を調べて知っているだろうが…母さん…プレシア・テストロッサは上の判断で勝手に進められたのにも関わらず…その事件の責任を全て負わされた…んでそれは紛れもない事実なのでこれを管理局に伝えたところで意味はないだろう…そこでだあんたらには証拠を掴んでもらおう！…ってことだ」

「それだけを言うために私たちを呼んだのですか!？」

エイミイさんが叫ぶ

「それだけじゃない俺のことも含めてなど言ったら」

さすがエイミイ我慢できなかったか

「話を進めるが…俺が調べてみたところそいつらしくそ野郎共は今は管理局の上層部に所属している」

「なっ!?!上層部ですって!?!」

めっちゃ驚愕してんな…まあそりやそうか関係のないやつらが何故か上層部に所属してんだからな

「いくら上層部でも証拠があれば捕まえられる…だからあんた方には証拠見つけてもらわないと俺らも困るしお前ら管理局も困るんだ」

「わかりました…では必ず証拠みつけますね…」

リンディさんは俺の真意に勘づいたみたいだ…さすがリンディ…略してさすリン…語呂悪いな…

「では戦さんあなたについてお聞きしたいのですがよろしいでしょうか」

「また態度固くなってるぞ…それで?何から聞きたい」

さて：…どうでてくるか：…場合によってはふざけるが…

「あなたのあの瞬間的に移動したのは一体なんなの？」

「アレ？アレはただの高速移動だけど？」

普通なら瞬間的に移動したように見えるくらい速く動いただけである：実際俺はまだ師匠である悟空のスピードには追い付けないが人間が：いや最高ランク魔導師が視認できないくらいの速さならお手のものだ

「あ、あれがただの高速移動だって!?!冗談も大概にして!!」

信じられないのはわかるぞエイミィよ俺もそうだったから

「落ち着きなさいエイミィ」

とリンデイさんがエイミィを落ち着かせる

「す、すみません」

「でーほかはー？」

と軽い感じで俺はリンデイさんにきく

「クロノのバインドを一瞬で破壊した力はなんなの？」

「うーん超能力ー？的なものをなんやかんやしたやつです」

てな感じでふざけていうともう我慢出来なくなったのかリンデイさんが話す

「ふざけないでください！私たちはあなたのことを知りたくてここま
でやって来たんですよ！それにここに呼んだのはあなたですよね！
あなたがそういった態度をとるのならここであなた方を捕縛するこ
とだつてできるん『ガッ』キャッ!」

「なっ!?!」

急にリンデイが隣から消えたことでエイミィが驚く

「んー！んー！んー!!」

そのリンデイを俺は首にあるマフラーを触手のように操りぐるぐる巻きにして中に浮かせていた

「俺は険しい感じの空気が嫌いだ」

(いいおっぱいだな) マフラーデモミモミ

「んー！んー！んっ／／んー！んー！んー！」

「そんであんたらが険しい顔してるから場を和ませようとしてるのに」

(やべーとまんねえよこれ) マフラーデモミモミ

「んー!んっ／＼／＼んっ／＼／＼んんー!」

「それで怒りますかね」

(そろそろフィニッシュかな?) マフラーデモミモミキュツ

「んっ／＼／＼んっ／＼／＼んっ／＼／＼んんん／＼／!!」

「やめなさい!」

『ゴツ』

「ゲンコツツ!」

くしばらくお待ちくださいく

くしばらくお待ちくださいく (大事なことなので二回)

「すみませんうちの息子が…」

「いえいえこちらこそこちらが話を伺っているというのに理不尽に怒ってしまって…」

そこには顔を真っ赤にしたリンデイとエイミイとすまなそうに謝ってる母さんと頭にタンコブができた俺がいた

「ちっ楽しんでたのに…」

「何から言ったかしら?」

「何もいってないでござりまする!」

怖いさすが母さん怖い

「はあ…いつもはこんなことしないのになんでかしら?」

と母さんは呆れる

「いえ、私が悪かったので…」

と恥ずかしそうに謝ってるリンデイさん

「すまん…俺は約束を破られるのと理不尽が大嫌いだ…リンデイさんが言ったあの『あなた方を捕縛すること』それがトリガーになってしまったんですよ…それは今回の話とは全く関係ないことだったからな」

「す…すみません」

「ってなんで彼女に謝らせてるのよ!イクサ!ここはあなたが謝ると

「ころでしょ!!」

怖いよ母さん…

「謝ってるよ…」

「あ、あのさっきのことはいいんで話を進めましょうよ」

「わかりました…今度はわりかし真面目にやりなさい」

と母さんは俺を威圧してくる

「……はい」

「でバインドを破壊した力についてですが…」

とリンデイさんが改めて質問する

「あれは魔力ではないのはわかってますよね？あれは“気”と言う力です」

たぶん間違えるだろうな

「“木”ですか？あのもりとかに生えてる…」

「ちやうよ…さすがに冗談ですよね…もつと簡単に言うなら気合いみたいなものです」

説明しにくいんだよな…これ（気）

「“気合い”ですか？さすがにただの気合いじゃないよね」

とエイミイが聞き返してくる

「説明するからついてきてくださいよ…」

“気”というのはこの世に存在するあらゆる万物に存在する力のことです…魔力は体の外から集めたものをリンカーコアにして使っているんですよ？」

リンデイさんに聞くと

「ええまあ少し違うけれどそんな感じよ」

「じゃあ分かりやすく説明できますね、魔力を体の外のエネルギー…自然エネルギーと仮定します。魔力が自然エネルギーなら“気”は生命エネルギーです」

「“生命エネルギー…!?”」

「はい、魔力は持たない人がいるようですが“気”は誰でもどの世界の人でもカエルでも鳥でも持っています」

「誰でも…それならなんで私たちは使えないの？」

エイミーが想像通りの質問をしてくれた

「それは本来使う必要のない脳の領域を使ってるからです」

「本来使う必要のない脳の領域…？」

とリンデイが頭に？を浮かべる

「だって人間は争う必要なんて本来ならないでしょそれならつてことで人間の脳が勝手にそうしたんですよ、〃気〃は戦うための力といっても過言ではないですからね。応用の幅が広すぎているんな事ができます…でバインドをこわしたのも、〃気〃の応用っすね、バインドに〃気〃を送って内側から術式っぽいのを破壊しました」

「あの一瞬でそんな器用なことができるなんて…」

とリンデイさんが驚くが

「え？あれくらいなら修行の第一段階くらいですよ」

と俺すっぱりと言う

「第一段階って…」

そんなことを聞いたエイミーは冷や汗をかいていた

「まあそんな感じかな？」

するとリンデイさんが真面目な顔をして

「では…プレシアさんとその娘さんを救ったのも…」

「ああ、〃気〃の応用の難易度がめっちゃ高いやつだけだな」

まあ超サイヤ人と界王拳をかさね合わせるくらい難しかったがな

…

「最後に…」

リンデイさんが質問してくる

「イクサさん…あなたは一体何者ですか？」

「俺か？俺は…」

化物…だよ」

「っ!？」

リンデイさんとエイミイが冷や汗をかきながら驚く

その理由は…俺の目が

緑色になっていたので………

く話しゆーりよーく

「では例の件が見つかるまでこちらに干渉しないでくださいね」

と俺は釘をさす

「ふふっわかっていますよ…大丈夫ですよもうあんなことにはなりませんよ」

「そんじやなー」

「ありがとうございますー」

そんな感じの挨拶でリンデイさんとエイミイは去っていった

くその日の夜く

「さて風呂風呂ー」ガララッ

俺が扉を開けると

「あら？大胆ねイクサ」

そこには裸の母さんがいた…若返る前ならまだしも今やピツチピチの20代の母親となった母さんのスバラシイボディに俺の理性が持つわけもなく

『ムクムク』ゲンキヒャクバイ!

「あらあら、イクサも男なのね」

「これは…そのあの…」

「そうだあのときのあれ私もやってもらおうかしら?」

「は?『ガシッ』え?ちよつとまって母さん!目が怖い!!ちよ!まつ!

ああああああああ!!」

その日の夜一緒に寝ようとイクサの部屋に行ったアリシア曰くなんか痩せ細ってたらしい

第四話 なんだかんだ平和な日常

SIDEイクサ

なんだかんだあつたがなんとか母さんに押し付けられた罪はなくなりそうだ：母さん曰くアリシアのクローンとして作ったフェイトっていう女の子に謝りたいのと自分がしてきたことは理解して欲しい：まあフェイトのことは知ってたが（前世の記憶で）本人に会っていないため初見っぽい反応はできた。まあ母さんにはバレたけどな

なんてことを考えていると

「お兄ちゃん！」

アリシアが俺を呼んだ

「はいはいなんですか？あなたのかっこいいお兄ちゃんですよー」

「もう！ふざけなくていいから!!」

てな感じのでもいつも会話が始まっています

「で、なんか用事でもあるのか？」

と返事をかえすとアリシアはもじもじしながら…

「そ、そのお…デ、デバイスが…ほしいなあつて…」

と言ってきた

「デバイス？それなら母さんにでもつくってもらえば…」

「それじゃだめなの！お母さんとお兄ちゃんが一緒に作ったデバイスがいの!!」

なんてアリシアのワガママを聞いていると

「それなら！速く作りましょう!!さ、行くわよ！イクサ!!」

母さんが俺の部屋に突撃してきた

「おいおいおい!!まてまて!!それならアリシアの希望も聞かないといけねえじゃねえか!!」

「え?!?!いいの!?!」

こんな感じでアリシアのデバイス制作がスタートした

「なんだかんだあつてイクサの家の地下」

「へええ〜こんなところがあつたなんてね」

「まあ、でっかい事件でも起こらない限り管理局とは関わらないと思つてな…：それならデバイスの改修とか修理するのに必要だと言つて女神様に頼んだんだよ」

ちなみに母さんとアリシアには俺のことは前世のことを除いて詳しく話してある。

「その女神様はやさしいのね…：で、どんな女神様だったの？」

とアリシアが首をかしげながら聞いてきた

「ずいぶんと…：いじりがいのある…：女神様…：でした」シミジミ

「あはは！楽しそうな女神様なのね！…：…：会えるかしら？」

「たぶん俺と一緒にいればいつか会えるよ」

恐らくだが干渉出来ないとはいえ夢の中とかに出てくるだろう

「で、話を戻すがアリシアはどんなデバイスがいいんだ？」

少しは悩むと思つていたがアリシアは悩むことなく

「フェイトのことずつとみてたからフェイトと色違いがいい!!」

すっぱりと答えた

「それならk「それなら簡単ね!!フェイトのデバイスと同じ要領で作つて色を変えればいいだけだし!!」

俺の話を遮つて母さんが話す…：親バカも大概にしろ!!

「まあそれだとフェイトちゃんのと性能的に同じやないかい」

「私はそれでもいいよ…：でも少しは色以外も違いがほしいかな…：ワガママじゃないんだけど…」

ワガママしていいよ…：いやワガママしロットオオオ!!（伝説の超サイヤ人風に）

「それなら基本的なところを変えずにAIだけ高性能にしてみるか？」

「そんなことができるの!?!」

二人とも顔が近いよ…

「ああできる…：サンダーソウル？」

『なんででしょうか？マスター』

とサンダーソウルは返してくる

「無理せんでええぞ？この人たちは信頼できるし、第一俺の家族だ」

『では…なんだぜ？アニキまた俺に苦労させんのか？』

「しゃーないだろ、アリシアのためだ」

『ま、いいさ…最近話し相手にもなってくれねえから寂しかったんだぞ？だから今回はデバイスの整備してくれんなら許したる』

「あははは…了解したよ」

「え？」

予想外の出来事にアリシアと母さんが驚く

「どっどっこういうことなの!?なんでAIがそんなに人間みたいにペラペラ喋ってるの!？」

そう母さんが言うとその後に続いてアリシアが

「バルディツシュともレイジングハートとも違う…こんなデバイスが作れるの!？」

と笑顔で聞いてきた

「こいつ…サンダーソウルは『ハイインテリジェントデバイス』って言うってな、インテリジェントデバイスよりも高性能なことができるデバイスだ。だからこんなにも人間っぽいんだよちなみにサンダーソウルはこんかんだが女性型AIだぜ？」

そういうと

『ちよっ!?それは言うなよ!!はっ…恥ずかしいだろうが!!このアホマスター!!!』

サンダーソウルはきつい口調で俺に意見を言ってきた

「仕方ねえだろ！お前を紹介しただけだろうが！つかなんだよアホマスターってのは!?!俺はアホじゃねーぞ!!」

なんて漫才?をしていると俺の手のひらに乗せていたサンダーソウルをアリシアが掴んで自分の顔に近づけながら自己紹介をしていた

「こんにちは！私はアリシア・テストロッサ！お兄ちゃんの義理の妹やあってまーす!!これからよろしくね!!」

そんないきなり自己紹介をされたサンダーソウルは

『お、おう…俺はサンダーソウルだ…アリシアのことは最初から見てるから知ってるぞ…』

ちよいと声が可愛らしくなっていた

「……………話を進めるぞ。それで、だ…どんなAIがいい？それとデバイスの名前は？」

「うーんと…優しくして私の無茶に付き合ってくれる心の強いAIがいい!!」

アリシアは決めるのが速いな…将来は…管理局の部隊の隊長とかになりそう

「了解…じゃ名前は？」

「えーと名前はね…えと…お母さん!!」

とアリシアは母さんを呼ぶがまだサンダーソウルのこと硬直してたらしく

「……………へっ？何かしらアリシア？」

「私の魔力変換資質分かる？」

すると母さんはさつきとはうってかわってすごい笑顔で

「そんなのわかるにきまつてるじゃない!!アリシアの魔力変換資質は

『雷』よ!!」

……………なるほどやっぱりフェイトの元だけあって同じなのな

「うーんそれじゃ……………」

やっぱり名前は悩むみたいだな

「今決めなくてもいいぞ、デバイスが完成してからでも遅くはないし…」

そんなことを言っているとアリシアはくいぎみでこう言った

「それじゃだめなの！名前が最初からあった方がお母さんたちも楽だし私のデバイスも嬉しいでしょ!!だからもうちよつとまってよ!!」

「わかった…アリシアが名前を思い付くまで待ってるよ」

〜10分後〜

「きくめた!!私のデバイスの名前は…」

「アリスアのデバイスの名前は…?」

俺は母さんでハモリながらどんな名前なのか期待する

「私のデバイスの名前は『ライティング』!!」

「ライティング!」

アリスア曰く雷⇨ライジングでそれを元にした名前らしく頑張つて女性っぽくしようとしたらこうなつたらしい

「いい名前なんじゃね?」

俺がこう答えると

『いい名前だな!アリスアはセンスがあるのかもしれないな』

今まで黙ってたサンダーソウルがしゃべった

「お前いきなり喋んのな」

『そりや一緒にいる時間が長くなるかもしれない後輩デバイスだぜ? 気になりもするわ』

「そんじゃデバイス制作はじめるか!!」

『そうだな!!』

ちなみに母さんはアリスアのセンスに感動したのかアリスアを抱き締めてまた硬直してたので後ろからアリスアとサンドイッチになる形で俺も抱きついたら再起動した

……………母さんのおいはいにおいだったぜ

〜二日後〜

「でっきたあああああああああ!!!」

てな感じで母さんと一緒に制作を開始して頑張ってたらず想を遥かに越えた速度で完成

「というわけでライティングのこと呼んでみてアリシア」

アリシアをリビングに呼んでデバイス発表会である

「うん!わかった!!:ライティングおはよー!!」

『……マスター認識:アリシア・テスタロッサ:A Iを起動します
………おはようございますマスター』

「や、やったあああああ!!ついに私も魔導師よ!!」

そう嬉しそうに叫ぶアリシアの手には三角形の白いデバイス:バルディッシュの待機状態と同じ形をしたライティングが乗っていた

『マスター?そんなに喜ばれるとさすがに恥ずかしいのですが:』

どうやらA Iの作成は成功して、アリシアは俺のサンダーソウルと同じハイインテリジェントデバイスの所持者になった

「ふふっ恥ずかしがらなくてもいいんだよイティ?私のデバイスなんだから!」

『イティ?…なるほど私のニックネームですか:う、嬉しいですマスター:…こんな私に名前をくれて:…』

そんな感じで嬉し涙?を流してるイティをアリシアは自分の頬でさすりながら

「よろしくね!イティ!!」

『うん!よろしくねマスター!!』

こんな感じでアリシアのデバイス発表会は幕を閉じた

『あの:イクサさん少しよろしいでしょうか?』

「ん?なんだいイティ?」

アリシアとイティの話が終わるとイティがアリシアの手から離れて俺に近づいてきて質問をしてきた

『ありがとうございます。私を作ってくださいって…あなたのおかげで最高のマスターに出会うことができました』

「気にするなそれにデバイスを作ってくれと言ったのはアリシアだお礼ならアリシアに言ってくれよ」

と俺が返事をかえすと

『いえ…マスターが言ってました私というAIを作ってくれたのはあなただと…なのでどうしてもお礼を…』

優しいイティだからか？礼儀正しいな

「…気にすんな、お前のマスターはアリシアだろ？俺が居ないときはアリシアのこと頼んだぞイティ」

『りよ、りようかいです！』

「よし母さんご飯つく…」

俺がご飯を作ると言うために母さんの方を向くと

(…ω…)

こんな顔をしてぐっじよぶしていた

「……………」

母さん…わかるよ！わかるけど…！まずそのすんごい鼻から流れ出てる赤い『娘への愛』…止めようか……

やっぱり母さんは親バカだったよ……

第五話 証拠発見!? 裁判!? え? 囑託魔導師試験…?

イクサSIDE

「…本当にやるんですか?」

「当たり前よ、これは試験なのだから」

(・ω・)

「そんな顔をしてやめませんよ」

「チツ」

俺は今、管理局の本局の模擬戦ルームみたいところにいた

「いいんだよ? そんな遠慮しなくても…」

「いや、遠慮じゃなくてですね…」

俺の前には模擬戦の相手である青髪で長髪のお姉さんがいた

「女性と戦うのはちよつと…」

こんな状況になったのはすうじかん前までさかのぼる

〜回想〜

〜数時間前〜

「は? もう証拠見つけた? …え? 責任逃れしたやつら牢屋にぶちこんだ?」

「はいそうですよ」

唐突に家のチャイムがなるから出てみればリンデイさんがいるかなんだと思ったら俺の頼んだことをたった二日で終わらせたなんというから俺の理解が追い付いてなくてさっきのやり取りも三回目である

「え? …速すぎませんか?」

「そりゃ悪いやつらが管理局にいるなんて情報が入ったんです。管理局の情報に長けたものたちで調べればこんなものよ」

管理局は有能なのか無能なのかどっちかにしろよ…あつ無能なのは上の奴らでしたね

「それで要件とは…」

「プレシアさんの裁判のことです。彼女にきてもらわなければ裁判もできませんので…」

「アツハイ」

もはや学校の朝礼の発表で緊張しまくってガツチガチになったガキと同じような反応しかしていない

「それであなたにも同行してもらいたいのですよ」

「いいですよ、ていうか俺は行かなければ行けないというか…連れていかれるというか…」

証拠が見つかって裁判を受けることになったら母さんは俺も管理局に連れていくらしい…なぜかは知らないが…

「ほら行くわよイクサ！」

「…は？準備速すぎだろ母さん…」

母さんは今日、リンディさんが来るのがわかっていたのか準備万端だ

…いやなんでだよ

「あの管理局よこんな管理局としての評判が悪くなりそうなことは速く終わらせたいのよ」

「そうなんだ…」

管理局というのはいつの時代でもあまり変わんねえんだな

あと心読むな

くというわけで管理局く

母さんの裁判は裁判なのかな？って疑うくらい速かった。

一応ロストログア関係やその他諸々で母さんの収容期間は1ヶ月はあるかなと思っていたのだが…なんと1ヶ月の魔法禁止と自分のデバイス所持禁止だけで終わるといふ弁護側の俺であっても不思議な判決結果となった

母さん曰く

「なんでそんなに刑罰が軽いのよ！なんでよ!!」

らしい…母さんもアリシアを取り戻せたことから自分のやって来たことも後悔したりどんな刑罰でも受け入れるつもりだった。だけど管理局側の人曰く

「いろいろ彼女をことを調べたがあれは同情せざるを得なかった。そ

もそも勝手に計画を強行されて娘を失いかければロストログアにも手を出すよね」

と述べている。上の奴らにもいいやつはいるのな…

そんなこんなで待合室で待機していると

「お邪魔しまーすー！」

「どうぞ…」

リンデイさんと青髪長髪のお姉さんが入ってきた

「…でなんすか？」

「ねえイクサクくん…囑託魔導師試験…受けてみない？」

「デバイス持つてるのバレてるー!？」

く回想終わりく

これが今の状況に至った経緯であります

「はあ…分かりました受けてしまったからには最後までやりますよ」

囑託魔導師試験は筆記試験と模擬戦試験の2つで筆記試験は満点だった、あとは模擬戦試験をうけるだけなのだが…相手が女性なのだから…男としても時野 戦としても女性を相手にするのはかなり抵抗がある

ましてやその相手が『クイント・ナカジマ』という暇だったから来たとか言ってる魔導師なら尚更だ

「速くデバイスをセットアップしちゃってー！」

前世の記憶で彼女が死んでしまうことが知っている…これが個人的に気まずいのだ

「はあ…いくよサンダーソウル」

『スタンドアップ』

サンダーソウルから音声流れる

するとガシャガシャと音を立てながら首に引っ提げていたサンダーソウルが剣となる

「へえくそういうデバイスなんだ」

「まあ…特殊ではありますね…セットアップ」

『セットアップ』

光が俺包み…その光が収まると俺の服の色が変化していた

「え？それはバリアジャケットなの？」

「一応そうです」

サンダーソウルはセットアップしても服の色が変わるだけにか
見えないがしつかりとバリアジャケットとしての機能もついている

「はじめましようよ…クイントさん」

「さつきみたいに女だからって手を抜かないでね」

仕方ないだろ…女性を相手取るのは嫌いなんだよ

「じゃあ、私から行かせてもらおうよー！」

俺はクイントさんの言った言葉を合図としてギアチェンジする…
そして俺は構える。5秒くらいたったあと

「リボルバーナックル！」

「っ!？」

(速いっ!?)

クイントさんの攻撃で試験が始まった

「チツ…」

俺は予想を遥かに上回る速度で突撃してきたクイントさんの認識
を改めながら俺は回避する

「まだまだあ!!」

クイントさんはそのままの勢いで旋回しまた俺に突撃してくる

「二度も同じのが通じるかよ!!」

俺は剣を握っていないほうの手でクイントさんの拳に俺の拳をぶ
つける

「…っ!？」

(お、重い!!)

そのまま俺たちは後ろへと飛ぶ

「今のをそうかえすのね…でもそれは自分の腕が折れるかもしれない
から危ないよ」

「問題ねえ…俺は頑丈だからな」

俺はサイヤ人だ肉体の頑丈差で言えば世界の中でもトップクラス
だ…その程度でおれるものか

「じゃあもっかい行くよーリボルバーナツクル!!」

クイントさんはさつきよりもさらに速度をあげて俺に突貫する

「フツ…」

ガシツガシツ

「なっ!?!」

クイントさんがリボルバーナツクルを止めたことに驚く

「右で打つと見せかけて本命は左っすか」

「へへっバレちゃった?」

バレるも何もクイントさんはほんの少しではあるのだが、魔力を両手に込めるとき本命を叩き込む方の腕が少しだけ多いんだよな

「今度はこっちから行きます」

「いいよー!ガツ!?!」

俺はクイントさんの腹に蹴りをかます

「くああ…くっ!、まだまだあ!!やあー!!」

俺はクイントさんの拳を最小限の動きで左に避けクイントさんに足を引っかけて転ばそうとする

「おつと!?!おつととと…なかなかやるね」

だがクイントさんはなんとかバランスをとりたちなおす

「……………」

「だんまりか…なんか言ってくれないと寂しいよ」

「そんじゃ遠慮なく…」

クイントさん!無駄な動きが多すぎます!!」

「えっ!?!」

「あなたは相手にダメージを与えることに意識を向けすぎて攻撃が大振りになってます!それにリボルバーナツクルの時に魔力を両手にこめるときフェイントのために無意識であると思えますが本命の方が魔力がほんの少しだけ多いです」

近接戦闘のプロフェッショナルである俺に近接戦を仕掛けるとはな…

「なっ!?!なんで私が注意されてるの!?!」

もつと追い討ちしよう…

「さらに言いますけどあなた真面目にやってませんよね、そんなので試験官がつとまるのですか？」

と追い討ちをかけてやると

「わかったーわかったー真面目にやるから!!」

まるで借金を取り立てられている人みたいに俺の服にすがり付いてきた

結果は俺の圧勝、クイントさんのプライドをズタボロにしてしまったが嘱託魔導師試験は無事合格。ついに俺は嘱託魔導師になってしまった

?????
S I D E

私の裁判が終わって1ヶ月がたった

やることなく暇なのでアースラの中を歩いていると…

「…え!? な、なんで!? 母さんが!？」

これが私の大切な存在を助けてくれた人との出会いとなることはまだ私はしらなかった

第六話 警戒↓そして？

イクサSIDE

魔導師試験が終わってから休憩していると俺をバインドしたやつが話しかけてきたので今は休憩室みたいなどころにいる（それまでは廊下に立っていた）まあそれなりに会話はしているんだが…

「はあ!?お前まじで言ってんのか!？」

「だからさつきからそうだと云っているだろう!!」

と俺と口喧嘩みたいになってるクロノがいた

「だから僕は14歳だ!!」

「お前みたいなの…ぷっ…背丈の小さい…くっ…やつが14のわけあるかあ!!」

てな感じで俺のサイヤ人特有の煽り癖が発動していた

「大体君の背が大きすぎるだけだろうがあ!!」

「いや、平均身長だが…」

俺のしってる14歳男子の平均身長は俺くらいだったような気がする。まあそれを抜いてもクロノがチビなのにかわりはない

「ふざけるな！僕より背がでかいだけで何があるっていうんだ!!」

「いやあ…あんときお前に年下だろ?とかガキんちよとか言ってたからなあ…あんときはすまん」

実を言うと俺はクロノと話しててこいつが14歳だっつーことを忘れていた。それなりに前世のアニメリリカルなのは主要人物だったから年齢も覚えているはずなんだか…なぜか忘れていた…俺の現時点での推測だがあまり重要じゃない記憶はこっちで生活していくうちに抜け落ちていくのではないだろうか…

そんなことを考えていると…

「だあああ!!もう我慢できるかあ!!僕と勝負しろお!!」

「まあまあ抑えてクロノ」

世話好きな姉がヤンチャな弟の喧嘩を止めるところみたいなの空間をエイミィとクロノが作り出していた

「まあ…すまん俺はこういう性格だからなあ…」

「ちっ…」

さすがクロノいじりがいがあるわ

「イクサ」

「なんだ？母さん」

急に隣に座っていた母さんが話しかけてきた

「なんで私の罪こんなにかるいの？」

「さあ？俺は知らんしなにもしてないぞ」

やっぱり母さんはあの判決がまだ気に入らないようだ

顔が（・ω・）になってる

複雑な気持ちだろう覚悟して裁判にいったらあれだもんな

もう「あんた理不尽の被害者じゃんそれじゃとりあえず罪かるくし

とくわー」的なノリだったし

そんなことより自分の思ってるより罪が軽くて罪滅ぼしきれな

くてしよぼくれてる母さんかわいい

その隣で母さんによかつて寝てるアリシアかわいい

なんて俺の脳内が平常運転してると

ーコンコン

『はいっていいかしら？』

この声…リンデイさんか

「いいですよー」

本来ならクロノかエイミイが返事をするところなのだろうがあい

つらいチャイチャしてるんで俺が返事した

「お邪魔しまーす」

「なんすか？急に大事な話でも…っ!?!」

なんでこの子いるしいいいいいいいいい!!!

フェイトSIDE

廊下で母さんを見つけてからビックリしたから理由をリンデイさんに聞きに行ったらなんでもとある少年が姉さんと一緒に救ってくれたらしい…でもそのとき私は思った姉さんを生き返らせれる力を持つた人がなんで虚数空間にいるのか…と

だから私はリンディさんに頼みこんで母さんたちを救ってくれたらしい少年に会いにきた

でもやっぱり一番に目にはいったのは母さんだった

「母さん…」

「フエイト……」

母さんは驚いた顔をしてた

「母さん…なんで「ごめんなさい!!」へ?」

私がいしゃべろうとしたら母さんが私にかけよってきて抱き締めた

イクサSIDE

……… (。 ㇔) ハッ!!?

し、しまったあまりに予想外のことに意識が飛んでいた!

い…今の母さんの動き…見えなかった…これが母親の心を取り戻した母さんの力…

ん?さてよ…母さんの肩によかって寝てたアリシアはどうなって… (チラッ

ああ!!倒れる寸前んんんんん!!

キヤツチ!!…せ、セーフ…

とりあえず寝転ばせて俺のマフラー持たせとこ

「ごめんなさい!!私、あの空間に落ちてから気付いたのやっぱりあなたも私の娘だって…だからずっと謝りたかった…あんな酷いことしてごめんなさい!!許さなくてもいい!でも私の娘でいてほしい!だから…!」

フエイトSIDE

「あ…うん……」

廊下で見たときと同じ…あの暖かい目…これで確信した…もうあのときのこわい母さんはいなくなっただって…私にムチを打った母さんもういないんだって…

「許すよ…母さん」

「うん許さなくていいから…え?…ゆるして…くれるの?」

「だって母さんは優しいって知ってたから」

そういつて私はおもいつきり笑った

「フェイト……ありがとう……こんな私をゆるしてくれて……ありがとう……」

母さんは泣いていた……たぶんゆるしてもらえた嬉しさの涙とあんなことをしてしまった後悔の涙だろう

「涙をふいてよ母さん、母さんが泣いてるところなんて見たくないよ」「ご、ごめんなさい……つい……」

私も優しい母さんが見れて嬉しい……

だからこそ気になる……おそらくあの姉さんにマフラーを持たせて寝かせたあの少年……？なのかな？……なんで虚数空間にいてなおかつ姉さんを生き返らせれて虚数空間から出てこられたのか

「母さんあの人は？」

そう聞くと母さんは

「私たちを助けてくれた人そして私たちの新しい家族よ」

と言った

イクサSIDE

うおいまじかよ……それいきなり言っちゃうかー

自己紹介する展開じゃんかー……つかフェイトさん警戒しすぎでは？見た目だけじゃなくそーゆーところまでアリシアにそっくりかよ……アリシアと違って視線鋭いし……

「どうも……時野 戦だ……いやこの場合イクサ・テストロッサのほうがいいのか？ま、まあいろいろあつて虚数空間に飛ばされてどうしようかなって思ってたときに母さんとアリシアを見つけたから気絶寸前までがんばつてアリシア生き返らせて母さんと一緒に虚数空間から脱出した……んでなんやかんやあつて今に至るってわけだ」

とりあえずおおまかなところを説明したが……やはり警戒はとけなかつたな

「なぜ母さんと姉さんを助けたんですか？」

やっぱり聞いてくるよねー！知ってた俺この展開知ってただって

すでにアリシアで経験してるし！

「…助けたかったから」

「本当にそれだけですか？他にもなにか理由があるはずですよ」

おっほそっくりアリシアそっくりだよさすがフェイトさんだけはある…ただこれだけは本当に「それだけ」なんだよフェイトさん…ただ純粹に助けたかったんだ…「今度こそ」助けれると思ったから…

「それだけだよ…えと…」フェイト・テストタロツサです好きに呼んでくれて結構です」じゃあフェイトで…」

辛辣だな…まあ仕方ねえだろうが…虚数空間っていう落ちたら二度と帰ってこれない空間にわざわざ行つてアリシア生き返らせてそこから脱出したつて言うんだ怪しいにも程があるわな…

こんな感じで自分のしたことを振りかえつてにその怪しさを再認識しているよ

「それじゃあ確かめさせてください」

「確かめる？」

あ…いやな予感が…（サイヤ人の直感）

「自慢ではないですがこれでも私は人の感情を読み取ることにたけていると思つています…なのであなたがもし助けたいだけじゃなく邪念をもつて母さんたちを助けたのなら何に利用されるかわかりません、あなたも魔導師でデバイスを持っていると聞きました、なので私と戦つてください」

「……………わかった」

プレシアSIDE

なんでこんなことになったの？

私の頭は？だらけだった。イクサは確かに最初は怪しいやつかと思つたけどこんなに警戒される必要があるの？フェイト…

イクサはめっちゃ優しくいいやつなのよ！まあ自分の知らないやつが家族なんて紹介されても警戒するわよね…待つて！それだと私すごいちよろくない？助けられただけで警戒しなくなるなんて

…いやでもイクサは優しい子だもの…私たちを利用するなんて考えられない

そんな私を前に話はどんどん進む

「できるだけ広いところで戦いたいですそれこそ無人世界とか」

「ええ!? ひろすぎない!? てか許可とれるかなあ?」

「わかったわ、少し連絡してみるわ」

エイミイとリンディに話しかけるフェイト

「……………」

目を閉じて壁によかつてるイクサ

これあきらかにとんでもないことになるわよね! ああ…フェイトもイクサも心配…

イクサSIDE

「……………」

いやな予感は当たったよ…リリカルなのははお話(物理)が基本だもんなあ(俺の偏見)

とりあえず精神統一しとくか

「許可とれたわよフェイト」

「ありがとう義母さん」

ちよつと許可とるのはやくなーい?

「じゃあ行きましょうか」

俺の意見はなしですか…

く無人世界シゼンコーヤく

「ではどちらが降参または大きなダメージを与えられたら模擬戦終了です」

ここ、ドラゴン〇ールの荒野っぽいところにそっくりだなそれなりに自然があつて岩の積み重ねられた柱みたいなのがたくさんあるつて最初の〇ジータ戦のところじゃん

「デバイスを出してセットアップしてください」

フェイトさん他人行儀全開ですね…

「……………」

やらなきやならんらしい…はあ…まあ警戒され続けるのも嫌だし
真面目にやりますかね

「行くぞサندانダーソウル」

『了解、スタンドアップ』ガシヤガシヤ

「優しすぎるってのも案外困るもんだな」

『セットアップ』

フエイトSIDE

彼、イクサさんには怪しいっていうのもあつたけど何か…こう不思議だった。近くにいるだけなのに伝わってくる…この説明しにくい暖かさ…

「バルデイツシュ、セットアップ」

『イエス、サー』

でもこの戦いで確かめられる！

「はあああああ!!」

「うおっ!」

ガキンと音を立てて私のバルデイツシュとイクサさんのデバイスがぶつかる

イクサSIDE

「結構…：力あるんだな…くっ!」

いくら魔導師とはいえ女の子だとあなどっていた…！予想以上に戦いなれている…！

そのまま俺は後ろに飛び退く

「逃げるんですか？ですがそれでは私は降参しませんよ！はあ!」

あれはフォトンランサーか！やっぱり速い！

「ちい!」

体をひねってかわし、攻撃するためにフエイトに突撃する

「はあああああ!!」

俺のふった剣は軽くてよけられる

「容赦ありませんね」

「真面目にやんないのはだめだと思ってな」

たぶん真面目にやらないほうが怪しまれる

「しゃべってていいの?」

「それだけ落ち着いてるってことだ」

そのまま俺はフォトンランサーをまともに受けた

フェイトSIDE

これなら少しはたきつけられたかな?真面目にやってくれてるのはわかるけどあきらかに手加減されてる…少し悔しいかな…

フォトンランサーの爆発の煙がもくもくとそらに漂う

「……………」

出てこない…何かしてくる?

「……………」

なにもしてこない?それなら…

「はあー」

これでどうかな!!

私はアークセイバーを飛ばす

「はあああああ!!切り裂け!!」

なっ!?!煙と一緒に切り裂いた!?

「いや〜手加減してすまなかつたな!どうしても女性相手じゃ手加減してしまっただからそっちが本気でやってくれ!!そしたら俺も手加減できないだろうから!」

「…わかりました」

イクサSIDE

ふい〜い〜い〜ってえなあ速いぶん痛いのか、まあ直撃だったしな…俺も手加減の癖治さないとな

ーキュイイイイイ

「!?!」

あれは砲撃魔法のサンダースマッシャー!?!本気でやってくれとは言ったが砲撃魔法かよ!!

「これを防がれたら私は降参します！だから手加減なしで!!」

ん？いきなり他人行儀じゃなくなつたな、つまり怪しいところはなくなつたのかな？

「それなら俺も手加減なしで行くしかねえなあ!!サンダーソウル!!」

『了解だぜ！マスター!!』

フェイトに剣の切っ先を向け、剣のさきつちよに魔力を集める

「これが私の本気!!サンダースマツシャー!!」

「くらえ!!サンダーバースト!!」

俺とフェイトの砲撃魔法がぶつかり合う

「はあああああ!!」

フェイトSIDE

押されてる!!全力じゃないけど結構魔力込めたんだけどなあ…

「くっ…」

このままじゃ…

「はあああああ!!」

これなら!!…そんな!?押し返せない!?

「押し返せるわけねえよ!!俺の全力じゃねえが本気だぜ!!」

「そ、そんな!!」

「手加減なしって言ったのはフェイトの方だぜ!!」

確かに言っただけどこれほどなんて…

「これで終わりだあ!!」

「あっ…」

イクサさんの砲撃魔法に飲み込まれ…

イクサSIDE

「はあ!!」

俺はその掛け声と共に砲撃魔法の軌道をずらす

ドガンと音を立てて離れた岩の柱に直撃した

「大丈夫かあ!!フェイト!!」

これであたつたら後が怖いぜ…

「大丈夫!!あたってない!!」

たぶんフェイトはバランスを崩したのかしりもちをついていた
ん?すこしうれしそう?まさか…

「フェイト!!お前途中から楽しんでたろ!!!」

「気付いた?うん楽しんでた…私の降参、あなたは…イクサはこれか
ら私の家族!!」

ふう〜これでもう警戒はされないだろ

俺はそのまま変身を解く

『フォームアウト』

「お疲れさま、サンダーソウル」

『お疲れさまー!!』

よしアースラに戻るか

「フェイトー!アースラにもど『ガラツ』っ!?フェイト!!」

「えっ?」

そこにはフェイトの後ろの岩の柱が崩れてその瓦礫が座っている
フェイトに迫っていた

くそっ!俺の砲撃魔法がかすってたのか!?この距離じゃ間に合わ
ん!!瞬間移動でフェイトのところにはいけるがそれじゃタイムラグ
でフェイトと一緒に下敷きになっちまう!!それだとフェイトが傷つ
いてしまう!!仕方ない!!

フェイトSIDE

だめっ…間に合わない!このままじゃ死んじゃう!

そんなっ…やっと取り戻せたのに…新しい家族ができたのに…こ
んなっ…こんなところで…!

「界王拳!!」

……あれ？痛くない……？それになんか……私、浮いてる？

「大丈夫か？フエイト」

「……………あ／／／うん／／／」

私はイクサにお姫様抱っこっというのをされてた

「悪いな怖い思いさせちまったな」

そういつてイクサは私をおろすと

「母さんに怒られるな…でもよかった無事で」
本当に安心した顔でアースラに戻った時の心配をしていた

第七話 化け物

三人称SIDE

イクサとフェイトの模擬戦が終わってイクサとフェイトはアースラに戻っていた。

そのアースラのとある一室では…

(…ω…)

イクサが部屋のはじっこでしょぼくれていた

「イクサ？ 私も言い過ぎたわ…だから機嫌なおしてちようだい？」

プレシアがイクサにそう言うが…

(…ω…)

イクサは反応しない

なぜこうなったのか説明しよう

あの模擬戦でフェイトを危険にさらしてしまったことでプレシアとフェイトの使い魔アルフが激怒、それでイクサのフェイトを危険にさらしてしまった罪悪感と自分が失敗したことによるショックに拍車がかかり、部屋のすみでしょぼくれているのだ

「あたしも言い過ぎた…フェイトを守ってくれたことには感謝してる…だから元にもどってくれないかい？」

プレシアと共にイクサに説教したアルフもイクサの予想外の変貌に驚きイクサのご機嫌とりに参加するが…結果はみでの通りだ

話がずれるがアルフはプレシアのことを嫌っていたが、今回のこれで少しだけ和解？した。模擬戦のときのフェイトをかなり心配しているのを間近でみてフェイトを傷つけなければ許してやるとプレシアにいい放った

「ねえもういいでしょ…そうだ！…ほらおにぎりあるわよ？食べる？」

「…食べる」

「(ちよろい…イクサの機嫌をなおすには食べ物か)」

イクサはどれだけ落ち込んでいようとやはり食べ盛りの少年だ。食い物には逆らえない。イクサが機嫌を悪くしたときの対処法を実感した二人だった。

時^{少し進む}
〜閑話休題〜

「本当にリンカーコアなしでフェイトさんを圧倒するとは…」

「そうですね艦長…」

「あれってどういう原理なんだろう？」

模擬戦の結果をみてリンデイ、クロノ、エイミイはイクサに対してそれぞれの感想を口にしていた

とりあえず説明するがこの世界の魔導師はリンカーコアという魔力をためるための機能のようなものを持つている。つまりリンカーコアがなければ魔力がためれない。魔力なしつまり魔導師にはなれないということになる。だがイクサが嘱託魔導師試験のときにリンカーコアがないということが判明した(アース内だが)その時は時間がないから説明は後でということになったがフェイトがプレシアを発見したことでフェイトとイクサの模擬戦が始まりまだイクサ本人から説明がきけていないのだ

ガラツと音がして部屋の扉が開き、機嫌が戻ったイクサと少し呆れた目をしたプレシアが入ってきた

「すまん、待たせた」

「ええ大丈夫よ」

そうやつとイクサの魔力について本人からの説明である

「えつと…なんの話だっけ？」

「あなたの魔力運用方法についてよ」

イクサの質問に対してプレシアが呆れた目で答える

「おーそうだったそうだった…でどのへんから説明すればいい？」

「最初からだ！リンカーコアなしで魔法が使えるなど本当ならおかしいのだからな!!」

軽いイクサの乗りに耐えかねたクロノが自分の思っていることをそのままに伝える

「最初からかあ…まあどつちにしろ変わらないから問題ないのだがな」

…どうやらイクサはクロノをからかいたかったようだ

「さて…とりあえず俺がやってることそのままに説明するから質問あつたら説明し終わつたあとに聞いてくれ」

「ええわかつたわ…」ゴクツ

リンディは自分たちからすればありえない現象の説明を本人から聞くことができるため息を飲む

「俺の魔力は “気” を魔力に変えてるのさ」

「え？」

リンディはイクサの言うことが理解できなかった

イクサから気については聞いていたがそんなことができるなど予想もしていなかったからだ、それに魔力と気は性質が似ているとは言え彼自身が明確に違うと言っていたのだから

「単純に言うところこんな感じだ」

「でも！魔力と気には明確に違いがあるでしょう!?なぜそんなことができるの!?!」

リンディが彼から聞いた気は生命エネルギーと言っていたが魔力は自然エネルギーと述べていた。ようするに彼が言いたかったのは気は肉体に秘められた力、そして魔力は体外から集めた力と解釈している（間違つてはいない）

「修行時代にな…師匠に覚えさせられた」

イクサはそう答えた

「師匠…に？」

「ああ詳しく説明しろと言われてもさっきの説明が限界だなんせ、俺が気を魔力に変換できているのはほぼ感覚だからな」

ちなみにここで師匠とぼかしているがこの師匠という言葉が指すのはイクサを転生させた女神のことだ。悟空は魔力なんてわからなと言っていたいたので女神に頼んだら魔力の “感じ” を覚えなさいと言われたらしい。そういつて女神はイクサの体に魔力を流し込み無理やり覚えさせた。イクサが感覚でやってると言っているのはその

ためだ

「は、はあ…」

もはやリンディもお手上げである

〜時は少し進むパート2閑話休題〜

「そんじゃありがとうございました」

「ええ何かあったら協力を要請するかもしれないわ」

「構わないが断ることが多いかもな…他人のことなんてわりとどうでもいいし…あ！フエイトが関わるなら承ると思うぞ（母さんが怖いから）」

そういつて瞬間移動で家に戻るイクサ、プレシア、アリシアだった

〜家到着（その時間なんと0,01秒!）〜

「はあ〜いろいろありすぎてまだ体が興奮してらあ」

「それなら散歩でも行ってきたら？」

「そんじゃそうするわ」

「夕飯までには帰ってきなさいよー」

「あいよー……？」

少し違和を感じたイクサだったが気のせいだと思い玄関から出ていった

「どうだった？お母さん？」

「すごい似てたわよ！」

「やった！（へーへー）／＼」

さっきの「夕飯までには帰ってきなさいよー」はアリシアがプレシアの声を真似てしゃべったものだ。ただの他人が聞いたら気づけないほどそっくりに真似れたアリシアも相当だがそれに違和を感じたイクサも大概だ

〜五分後〜イクサSIDE

「ふう…：そーういや海鳴市もスーパーの場所くらいしか知らねえな…

ちよいと探索でもするか？」

「囑託魔導師になったにしろここにしばらく住むことは決まってる、探索しておいて損はないか」

「散歩…かあ…久しぶりだな前世じゃ趣味みたいなもんだったし…」
「いろんなものを見つけたな…古びた祠とか住職さえこんなところにわざわざようこそというお寺とか…懐かしいなあ」

そんなことを考えていると

「なんだ？あれデカイ建物だな…ちよい行ってみるか」

くトコトコタツタカター（歩いてる音）く

「図書館か？今日は時間があれだから無理だが…何か調べものするときはこちら使うか」

「こんな俺だがわりと図書館が好きなのだ…あの独特の静かな感じが好き（わかる人にはわかる）」

『マスターそろそろ時間だぜ』

「お？もうそんな時間か…さて帰るとしますか」

「こんな感じでサンダーソウルがたま〜にテレパシーで話してくる…なんかこう…かわいい!! たま〜につてところが俺に気を使ってるようで…こう…かわいい!!（大事なことなので二回）」

『おい聞こえてんぞマスター』

「すまんすまん、ほれ帰るぞ」

くタツタカター（小走り音）く

「フンフンフーン」

鼻唄を歌いながら住宅街にはいった俺を待っていたのは

『ちよつと!! 離しなさいよ!!』

『うるせえ!! だまつてろ!!』

『はなして…! ください…むぐう!!』

『おとなしくしろつての!!』

『すずか!?! ちよつと!! すずかになにすんのよ!! むぐつ!!?』

『おらなにやっつてんだとつとと行くぞ!!』

女の子の悲鳴と男たちの焦りぎみの声だった

その声を聞いた俺は少しも迷うことなく

『サンダーソウル、母さんに連絡を』

『メッセージは?』

『今日は遅れるアリシアに怒られるのは覚悟してる、だ』

『了解だ』

その「名前」も顔も知らない女の子を助けるために動いた

そしてその声が聞こえた道の曲がり角から顔の半分だけだし様子をみた

『おらっ!早くしやがれ!!人が来る前にずらかるぞ!!』

『むっ!っ!ん!っ!むっ!』

『おらっ!入れ!』

『じゃあ!!行くぜ!!これで報酬は弾むぞお!!』

ーブウウウウウウウン

誘拐かよ…てかさういうことを考えない俺でもわかるほど雑な誘拐のしかただった。

(見ている間にも助けることは出来たが…面倒なのは嫌いだ特に警察とか警察とか警察とか)

とりあえず気づかれないように追うか

く俺、黒いハイース追跡中く

『おらっ!!殺されたくなければ歩け!!』

『むっ!?!……』

うわーちよいとひくわーいやめつちやひくわー(語彙力低下)乱暴過ぎんだろ子供相手に…(俺が優しいだけか…)

とりあえずここらへんでみとくか(森にある廃れたビルの近く)

あ、ビルに入った…屋上から潜入しよ

そう思い空を飛び屋上へ向かう俺

(あ、通気孔あった…こういうときはこれだよな)

く通気孔から潜入く

すずかSIDE

なんでこんなことに…アリサちゃんまで巻き込んだし…でもどうしよう…もしこれでわたしが■■■なことがばれたら…

「大丈夫よすずかきつと助けがくるわ…」

「う、うん…」

アリサちゃんは小声で震えながらそう言った

アリサSIDE

こんなことつてある!?今さら誘拐つて…でも私達なら覚えはある…きつとやつら金目当てね…

すずかのほうをみるとすずかが震えていた

「大丈夫よすずかきつと助けがくるわ…」

「う、うん」

すずかは震えながら返事をした

誘拐グループSIDE

「おおい！てめえら!!月村の嬢ちゃんだけつつたろうが!!バニングスの嬢ちゃんもさらってきてどうする!!」

「すんません!!」

「全く…まあこれで金が増える可能性が生まれた…許してやろう」

さて、あとは月村とバニングスの家に連絡すれば…金が手に入る…

ふははは暫くは遊んで暮らせそうだ

イクサSIDE

通気孔通るのはいいが音でバレるくね?と考えた俺は今、通気孔の中を舞空術で飛んでいる…通気孔の壁にぶつからないようにわりと精密な動きが要求される…まあ悟空のグミ打ちを避けるよりは簡単だが…

そろそろか?

俺は通気孔の格子を覗く…この動きも七回目だ、気が探れるとはいえ建物の構造までは読み取れん、だからさつきから女の子二人がいる部屋の周りをぐるぐるしていたのだ

こんな時にポンコツ発動するって…ちよつと、いやかなり悲しい…
お！当たりだ！ええと…部屋の扉は女の子たちの真正面、窓は…
あー子供じゃ届かないな…今は誰もいないか…
チャンスだな…だがあせるな俺これは誘拐だ…犯人たちは拳銃を
持っているかも知れん…犯人たちは…あの動きからして3つ隣の部
屋でどうやら電話中のようだ…：：：チャンスだ！

通気孔の格子を外して…よしいくか！

ースタツ！

「だ、だれ!?!」

『しー、しずかに』

「あ、あんたあのととき曲がり角にいた…」

『助けにきたとりあえず状況を説明する』

そういつておれは携帯電話のメモ機能で状況伝える

「そ、そんなこと言つて…あんたも私たちを拐いにきたんじゃないの
!?!」

そう金髪の子は小声で震えながら言う

『信じれないかもしれないが今は俺に従つてくれ』

「で、でもっ!!」

「アリサちゃん…言うこと聞いてみよう」

青…いや藍色の髪の毛の子がそういった

「すずか…：：：わかったわ…でどうするの?」

『このままあそこの窓はから脱出する』

「窓から?でもここは最上階よ!?!」

まあそうだよな、そりやそうだよ俺だつて屋上から来たんだから

「まあなんとかな…」

ーガチャ

「おいお前らお前たちの親は金とおまえらを交換しに来る…つてよ…
?」

「ヤベツ!?!」

「な、なんだてめえ!?!」 チャキ

おお…予想通り拳銃もつていらつしやる…クソツこの子たちを説

得するのに集中しすぎて気を探るのを忘れていたっ…!

「と、とりあえず手をあげろ」

「チツ…」

俺は素直に手をあげる

「おい、おまえら!!侵入者だっ!!」

やべえな…問題なく助けられるがこの子たち…絶対怖がつてるよ、ほら二人の気が乱れてるよ…(汗)

「なんだと!?!おまえら!!行くぞ!!」

ーダダダダダッ!!

「なんだ…正義の味方気取りのガキか」

「あ、アニキ…」

あれがボスか?したっぱの未熟さに対してボスが強すぎるだろ…俺がみる限り相当慣れていやがる

「…一つ聞くが、ガキ」

「なんだ?」

たぶん俺の予想の通りの質問がくるな…

「本当にその女共を助けにきたのか?」

ですよねー

「イエス、その通りだ」

「だとしたらとんだ命知らずだな…」ジャキ

は?…なんでマシンガンもってんの!?!ここ日本だよね!?

「お前は俺たちのやったことをみてたんだろう?…ここまでたどりつけたのなら…」

「あんなに堂々と誘拐してたら…ね」

たぶんすでに家の人達が動いてるだろうね

「おい、おまえらもつと考えてやれよ」

「…す、すみません!!」

…どこの番長とそのしたっぱだよ…だがやべえなガチでやべえ…こんな近くでマシンガン連射されたら…この子たちの鼓膜やぶれるかもしれないね…

「まあ、後ろの女共はともかく、ガキイ…お前はここで殺す…ここまで

たどりついたクソガキだ……ただのガキじゃねえのは理解できる……お前と問答をしてる間にサツにこられても面倒なんだな……」

殺す……か……散々聞かされたもんだな

「銃を突きつけられても、そのまま殺すと言われてもだんまり、微動だにせず……か、まあいい冥土の土産に教えてやろう」

わあまさかそのセリフ言っちゃうか……

「その藍色の髪の女はなあ……」

「だめっ!!言わないで!!」

ど、どうした藍色の子!?

「おっと……これがみえないのかあ……?」

そういつてやつらのボスはマシンガンで藍色の子にむける

「ヒッ……」

おいそりやねーぞ……

おれは藍色の子をかばうように動く

ーザッ……

「ほう……どうやらお前も本気で助けにきたらしいな……この状況で女をかばえるなど……まあいい……でそいつはなあ……」

「!?だめっ!!」

「吸血鬼っつー化け物なんだよ!!」

は?冗談も大概にしろよクソヤロウツ……!!こんなかわいい子が吸血鬼なわけねえだろうが!!

「はっ……驚き過ぎて声もでねえかあ?でどうだ?お友達ちゃんよ、自分の友達が吸血鬼だったなんてよ……」

……とんだクソヤロウだな、ちよつと頭にきたぞだが耐えろ俺、チャンスまでもう少しだ

「ふ、ふん!吸血鬼がなによ!!すすかはずかよ!!すすか以外の誰でもないわ!!」

「はっはっは!全く威勢のいい女だ……まあそこでみておけ!そのガキ

の血を美味しそうにナメるそいつをなあ！」

ージャキ

きたッ！もう我慢する必要はねえ！

「はっはあー!!しねえい!!クソガキがあああ!!」

ーズダダダダダダダダダッ!!

「だめっ!!お兄さん!!」

「いやあああああ!!」

女の子たちが叫ぶが俺は少しの痛みも感じない…何故なら

「…………ふはははこれで…………は?な、なんで、なんで

銃弾が空中で止まってんだよ!」

「あんたがペラペラといらねえことしやべってくれたお陰で、対策ができたぜ」

はい超万能気のバリア!もう勝ちだぜあとは逃げるだけだ!最後に言っておきてえことがあるから言っておくか!

「な、なんなんだ貴様は…何者だクソガキがあああああああああああああ!!」

「その藍色の子が化け物ってんなら俺はなんなんだろうなあ?なあおっさん?」

「二う、うわあああああああ!!」ドタドタ

「ああいいぜ冥土の土産に教えてやんよ…俺はな…」

怪物だよ人間の姿かたちをしたなあ!!」

そういつて俺は床が壊れないくらい気弾を床に叩きつける

ードン!!ボフウ!!

「はい、ちよいとごめんな」

俺は女の子二人を縛っている縄をほどき、両脇に抱える

「ちよ、ちよっとお兄さん!」

「しやあ逃げるぞー」

「逃げれるわけないでしょ!! いったいここからどうやって逃げるのよ!?!」

「さっき伝えた通りだ、窓から逃げるぞ」

「そういつて窓に向かって、翔ぶ」

「キヤツ!?!」

そしてマフラーを手のように動かし、窓をあける

ーガラツ

「ほら、体小さくしろ! 窓なんだ小さくしねえとでれねえぞ!!」

そういうと二人はできるだけ体を小さくしてくれた。俺はちよう

ど俺と女の子二人が通れるくらいの窓から二人を抱えて脱出した

ーピシヤツ

念のため開けた窓をマフラーで閉めておいた

「お、落ちるうううう!!」

「落ちねえよ」

「へ?」

「こ、これつてう、浮いてる?」

できるだけ使いたくはなかったがマシンガンだされたらしようが

ねえよな

「ああそうだ空翔ぶ術さ」

「そ、空翔ぶ術…」

あー恥ずかしい!! てかこいつらたぶん俺知ってる!! 名前はわから

ないが知ってる!! 高町なのは友達だこいつら!!

「すまん、怖い思いさせちまって…」

「い、いえ…」

藍色の子（仮称）は返事をするが金髪の子（仮称）は

「そ…」

「そ?」

あーいやな予感

「そうよ! 怖かったんだから! なによあれ! 私の知ってる拳銃じゃなかったわよ!?! それにあんたのことだって心配したんだから!! う、う、うわああああああああああああん!!」

ほらああああ!!泣いたああああああ!!てかこの子お人好しかよ
おおおおおお!!!

「ちよつとアリサちゃん!?落ち着いて!？」

↳金髪の子（仮称）なぐさめタイム↳

「とりあえずこつから近いほうの君たちの家教えて?家の前まで送るから」

それくらいはしないとな

「ここからだとすずかの家のほうが近いわ」

「う、うんそうだねアリサちゃん…」

んんー?藍色の子（仮称）の様子が変だぞお?

「…:…ねえアリサちゃん」

「なによすずか」

「…:…私が吸血鬼だって知ってど、どう思った?」

「…:…:…:…」

それかあ!確かそんなこと言ってたなあ!(あのときはわりと必死だったのでそんなこと忘れたポンコツイクサ)

「はあーそんなこと?そんなの決まってるじゃない」

「え?」

「すずかはすずかよ!!それだけ」

「…:…あ、ありがとう、アリサちゃん…:う、う、うわあああん!!」

今度はこつちかああああああああ!!

↳藍色の子（仮称）なぐさめタイム↳

「全くすずかはすずかなんだから…:」

「ふふっなにそれ?」

「あのーお二人さん?俺、案内してもらわないと家まで送れないよ?」

「あ、忘れてた」

「忘れてたんかい!!」

くイクサ案内してもらい中く

「ついたあ!!」

「ふうよかった…」

道中? (翔んでるから空中?) 両脇に抱えられてるの苦しいって言われたから、二人を背中に乗つけてマフラーさんにシートベルトになってもらってイクサタクシー(無料)になってここまで送ってきた、あれから誘拐犯も追ってこなかったから安心しました(切実)

お? 藍色の子(仮称)の家族か? あれ…たぶんお姉さんだろう

「あ! お姉ちゃーん!!」

「忍さーん!!」

お姉さんだったみたいだぞ、

ん? あるええ? なんか隣のお兄さんから殺気向けられてるんですが…なぜ? ……よし、帰ろう! (名案)

「あれ? さらわれたんじゃあ…」

「あのお兄さんが助けてくれたの!!」

「あのお兄さん? …だれもないじゃない」

「あ、あれ?」

「まあいいわとりあえず家の中に入る? アリサちゃんも」

「はー!」

よかった…これで家に帰れる…っ!?

「うおっ!」

俺は横からとんできた刀をかわす

「なにすんだ!」

「お前が二人をさらったのか?」

俺の目の前に藍色の子(仮称)のお姉ちゃんの隣にいたお兄さんが

あらわれた……

だから面倒なのは嫌いなんだよおおおおお!!!

第八話 落ち着けえ!! (ピロロロ)

三人称SIDE

「あのですね、俺はさらってないですよ?よく考えてください…さらったのに返しにくるか?フツ」

「ならば、話を聞かせろあの子たちをさらったのならその犯人共は少なくとも拳銃は持っていたはずだ」

(メンドクセー…)

イクサは無事さらわれた女の子たちをお家に返したのだが刀持ったお兄さんに絶賛殺気向けられ中である

ちなみにイクサが面倒くさがっているのは家に帰るのが遅くなればなるほどアリシアの機嫌が悪くなっていくからである(イクサは嫁さんの尻にしかれるタイプらしい)

「ああ、何とかした」

(ううんんんん!!速く速く速く!!帰らないとアリシアの機嫌がああああ!!!)

「何とかした…だど?…ふむ、ならば実力を見せてみる」

(この男、あの子たちを助けただけなのならなぜぼかす…なにか理由があるのか?)

イクサは内心アリシアのことを気にしながらも質問に答えるが焦っているためほぼ全てを略して答えてしまった

それゆえに刀の男に疑問を持たせることとなってしまった

「では俺はこれで…」

「逃げるか…仕方ない…ちからづくでも話を聞かせてもらおうぞ」

そういつて男は鞘から刀を抜かずに刀をイクサ向かってふるが

ーシュツ!

ースカツ!

「なにっ!?!」

男は驚いた、そんじよそこらの武術の達人でも避けるのは難しいほどの速度で刀をふったにも関わらず目の前の青年は「余所見をした

まま〃避けたから

「あぶねっ!!」

イクサは崩れた体制を立て直すためそのままバク転をして距離をとる

「なにすんだ!!」

「話を聞かせろと言っているだけなのに貴様が逃げようとするからだ」

正論である

実際話を聞けばすむ話なのにイクサはアリシアのことを考えすぎて思考力が大幅に低下してしまっている

(ああああああ!!ヤバイヤバイヤバイ……アリシアがああああああ!!!)

(こいつ……今の動き……)

イクサがかーなり焦っているのに対して男はわりと冷静だった
さっきの青年の動きが頭の中で何度もリピートしていた

無理もないだろう、男が使う武術は一般的な武術と違い(その流派のなかでも裏の武術というところだが)暗殺用の武術と言ったところだ。ならば殺気を極限まで薄くするのは基本だ。つまり目の前の青年はその殺気を極限まで薄くした一撃を防御するではなく避けたのだそれも余所見のまま、だ

(とりあえず油断も慢心もいけないらしいな)

男が警戒の度合いを上げている中、イクサはその低下している思考力をフル回転させていた

(ああああああ!!……今日は諦めようか、晩御飯……てかなんだ今の一撃!?殺気が〃ほぼ〃なかったぞ!!きもっ!!悟空との修行のおかげでたすかった……)

イクサの闘いかたの師匠である悟空は武術も嗜んでいるがそれのほとんどが礼儀作法と技などの基本だけだ。武術の達人とも言えるが闘いの達人という方が正しい

イクサが修行で強くなってきた頃悟空はあるときから修行のやり方を変えた

それは無意識の間をぬって攻撃をあてるというものだ

悟空は強くなりすぎて自分への攻撃を無意識に防げるようになり、また無意識に反撃や攻撃ができるようになってしまった

イクサの成長速度がかなり高く悟空はイクサならこれを習得できそうだなと思いい修行に取り入れた

その結果イクサは組み手のときはけちよんけちよんにされていたがその凄まじい成長速度で半年ほどで習得してしまった

「くっそ…こうなったら応戦して逃げるしか…」

「逃がさんぞ」

イクサは逃げるために

男は逃がさないために
構える

「あ！あの人よ！！私たちを助けてくれた人！！」

「えっ？本当!？」

がバク転で距離をとったため、家の塀で見えなかったのが家の門の前でできてしまい見つかってしまった

（あーおわったー、今日は晩飯なしかー）

「忍!!その男を捕まえろ!!」

「えっ?なんで?」

子供達の話の話を玄関で聞いていた月村忍は困惑した…がすぐに反応し、

「構えをときなさいあんたたち!!」

（あれ?俺だけじゃなくてそっちも?）

ひとくくりにされて予想外なイクサも困惑する

「だ、だがこいつはつよi「速く!!」はい!!」

男は怒鳴られてしょぼくれた

男がしょぼくれているなかイクサは

(あのきれいな人しってるわー…名前わからんけど…)

構えをとりて男に怒鳴った女性をしっかりとみれたので欠け始めた前世の記憶から色んなことをあきらめていた

―閑話休題―

イクサSIDE

「ごめんなさいねうちのバカが」

「いえこちらこそ話を聞かれただけなのににげようとして」

なんだかんだあつて冷静になった俺は自分がしていたことに気づき話をするにしがとりあえず家にあがつてと言われたのでその豪邸にあがつている

「それじゃあ話、聞かせてくれる?」

「どこから話せば…」

「全部よ」

「あ、はい」

いきなり忍さんの顔が真剣になったからスイッチを入れ換える俺

ちなみに今俺の目の前にいる女性は月村忍さんで、その横に座っているのは高町恭也さん、その逆側に座っているのが忍の妹、月村すずかちゃん、その隣にいるのが学校の友達のアリサ・バニングスちゃんだ。一応自己紹介は終わっている

「夕方、太陽が沈み欠けた時ぐらいかな…このあたりを散歩したらその子たちの悲鳴が聞こえて…」

〜イクサ説明中〜

「へえくなるほどねとりあえずあなたが悪い人ではなく心の底から善人なのは理解したわでもなんで逃げようとしたの?」

「それは…俺も義理ですけど妹がしまして、今日は妹が晩御飯を作ってくれててだから早く帰らないとって焦ってしまっ…」

もう晩御飯は諦めているが

「あら！それなら早く帰らないとね！」

「あ、はい」

「それじゃあ私たち月村が吸血鬼、夜の一族っていうことに関する記憶を消すか、誰にも言わない約束をして友好関係を結ぶか選んでちようだい」

記憶をけすか友達になるか…こりゃ一択だな

「友好を結びます」

「わかったわ…じゃこのことは誰にも言わない約束よ」

「えっ？そんなんでいいんすか？」

あまりの忍さんの軽さに素になる俺

「まあいつもなら問答無用で記憶消すけどあなたなら大丈夫だと思っ
てね」

「それっていつものやつらって口がかかるそうなやつってことですか？」

「まあそういうことね」

まあ普通はそうなるわな

まあでも初対面でこんなに信用されてるんだ俺も家族以外には話してない秘密を話しますかね（等価交換的な）

「初対面なのにそんなに信頼されてるなら俺も秘密言うしかないな」

「え？別に構わないのよ？」

「俺が気に入らないだけです」

「そっか、じゃあ聞くわよ」

そうすると俺は腰にまいている帯のみたいなのを緩くしてそれに隠していたものを取り出す

「…「なっ!?!」」

「俺もただの人間じゃないんすよ」

そう、サイヤ人の尻尾である

いろいろあつて
閑話休題

「それじゃまたねイクサクくん！」

「またねイクサクさん!!」

「連絡先教えたんだからたまには連絡しなさいよ！イクサク!!」

かわいい三人に別れの挨拶をもらい月村邸を出ようとする

「……………お前とはまた会いそうな気がするな」

「それ、今日みたいにならないければいいですね」

「……………そうだな」

そういつて俺は月村邸を出た

家の玄関の扉を開けると

「お・に・い・ちや・ん」

（か、かくごはしてたさ…）

「なんでこんなに帰るのおそかったのかなあ!？」ビリビリ

雷神がいました

「せっかく晩御飯作ったのに冷えちゃったじゃん!!」

《サンダーストライク》

「ギヤアアアアアアアアアアアアアア!!」

第九話 車イスの少女

11月初旬俺は

「おはようおおおおおおおお!!」

ードツ

「グエツ!?!……アリシアさん起こすときくらいは優しくしてください、俺の肋骨折れるよ?」

毎朝のノルマとなったアリシアダイブによって起こされていた

「だってお兄ちゃんこれくらいししないと起きないときあるもん!」

「うんそれ夜更かししたときだけな」

デバイスのメンテで大体夜おそくなる

最初に夜更かししたときなかなか起きなくて俺を起こすのに苦戦したんだとか（アリシア談）

「それに今日はお兄ちゃん図書館に行くんでしょ?なら早起きしないと……」

「わかったわかった……そらどいてくれ起きれないだろ」

アリシアダイブは大体俺の胸元あたりにアリシアのお腹が乗るの
でアリシアにどいてもらわないと起き上がれないんだ

というかなんで毎回こんな正確なダイブできるんですかね……

顔洗うために洗面所へ
〜閑話休題〜

「おはよー母さん」

「おはよう」

リビングに行くとき母さんがご飯を机に出している途中だった

ちなみに母さんも俺も朝に弱くテンションが低いから毎回こんな感じだ

アリシアって朝も元気だよな体が子供だからか?

「も〜!二人とも元気だしてよー!最初が肝心って言うんだから朝に元気にならないとだめだよー!」

3ヶ月くらい一緒に暮らしてわかったことだがアリシアは体と性

格は子供っぽいのだが頭のよさが子供ではない

それに気づいたときにアリシアに聞いてみたら

『乙女にはそーゆーことは聞かないのが常識よ』

と怒ったときの母さんと同じオーラをだしながら言ってた

まあたぶんそういうことなんだろう

「朝ご飯食べたら図書館に行くのよね？何の本さがしに行くの？」

「この国の歴史だよ俺は転生者っていうやつだからこの世界の歴史なんてさっぱりわからんし、歴史の本見るの好きだからなあ…やることもねえし暇くらは潰せるかなって」

一応ここも日本だが歴史が違うかも知れない別世界だし…それに歴史が好きな俺としては確認しておきたいことだ

「それなら丸1日くらいは図書館にいそうね…いいわよ夕方に帰ってくればそれでいいし」

「それは助かるんだが、アリシアが退屈にならないか？」

結構寂しがりやなのか大体出掛けるときにはついてくるんだが今回は一緒にいても楽しくないだろうからアリシアに母さんと留守番頼むわと言っておいた

「大丈夫よーアリシアと遊んでおくから気にしないで！」

あ、これアリシアと遊ぶんじゃなくてアリシアで遊ぶのニュアンスに近い気が…まあいつか

〜一時間後〜

「そんじゃ行ってくる、なんかあったら念話してくれ」

「まって！お兄ちゃん！」

トコトコと玄関にいる俺に向かってアリシアが走ってくる

「いってらっしやいー！」

ードッ

「グエッ！い、いってきまーす」

アリシアダイブは俺が出掛けるときも繰り出されるのか…

〜図書館到着〜

「さて、歴史コーナーはどこだ？」

歴史を知りたいといっても別に人間の始まりとかじゃないし戦国時代くらいの本があればいいんだが…

〈探索中〉

「おーあったあった…えーと信長伝記?」

信長って伝記になってるんだ…予想外すぎる

ーペラッ

なになに?あるところにおおうつけと呼ばれている男がいました…ってこれ昔話(史実)やんけ!

俺がみたいのもって別のだ!

まあ俺が手に取ってしまっただのが悪いんだが…

それにしてもなんで棚の一番下なんだよ!しゃがむのメンドイっての!

「どれがいいかな…お?いいのあった戦国の歴史大全集!これなら大丈夫そうd」そのお兄さんちよつとええか?」はい?」

振り向くと車イスにのったショートカットの女の子がいた

「ちよつと本とるの手伝ってほしいんやけどええかな?」

「別にいいぞ、どの本だ?」

女の子が歴史コーナーって結構珍しいな…俺の偏見かも知れないが

「一番上にある料理の歴史ってやつです」

ええええ…なんで料理の歴史さん一番上におるんですか!?!あんなが普通一番下でしょ!?!なんで歴史の一番大事そうなのが一番下に並んでるの?…気にしたら負けか

「よいしょ…つと、これでいいか?」

「ありがとうお兄さん」

「いいってことさ、女の子が困ってたら助けるのが男ってもんだと思ってるし」

はいそこー恥ずかしいこと言ってるのか言わない

え?だれに話しているかって?さあ?

「あ!そうだ!本読むのに手使って車イス動かしたら手疲れるだろ?机まで連れてってやるよちようどいいし」

『そいつはここ2ヶ月くらい商店街に来てるんだがだれかが困ってたりするとすぐに助けるし、人当たりもいいから商店街のみんなに人気なんよ』

『へえ〜』

『だからよ嬢ちゃん、お前さんいつもひとりだろ？ならあいつを家に招待してみたらどうだ？たぶん普通に了承してくれるぞ』

『ええええ!?!』

〜回想終了〜

「全くあのおっさんは…」

確かに俺は商店街いつたら近くにある広場でよくガキンチヨの相手してるが…

「でどうなん?」

「いいぞ、夕方までならな」

暇だし…

「やった!えへへ〜」

だいぶよろこんでんな

「それなら自己紹介がまだだったな、俺はイクサだイクサ・テストタロツサもしくは時野 戦だ」

「そーいやそーやったな私は八神はやてや、よろしゅうな」

〜はやてん家いこう!閑話休題〜

「ちよう座つててお茶いれてくるから」

「無理すんなよー」

〜ここが八神の家か、まあ普通だな

「はいお茶」

「おうサンキューな」

「自分から呼んだのに何もなくてごめんなイクサ」

「気にしねえよとりあえずそれはおっさんのせいにしとけ」

司書のおっさんはとりあえず今度おっさんの店に行った時にただで野菜をもらうつてことで許してやった

「あはは…おっちゃんがかわいそうやからやめとく…とりあえずトランプあるからせえへん?」

「いいぜ、ババ抜きか?それともシンケイスイジャク?」

「トランプ三昧」

「ちよう強すぎるでイクサ」

「いやはやてが表情に出しすぎなんだよ」

「ジョーカーとったときには「ああ!」って声出すしジョーカーとあわせて残り二枚になったら焦ったりするわで分かりやすい子だった

あとなんか八神って呼んでたら途中から「むずかゆいから名前で呼んで」って言われたので名前で呼んでますはい

「もう夕方かあ時間がたつのは早いなあ…」

「夕方!?やべえ帰らなきや!!」

「えっ?もしかして用事が?」

「妹に怒られる」

たぶん夕方には帰ってくるっておもってるからまた遅れたら雷撃やられる!

「そっか」

「とりあえず連絡先交換しとくか?もう友達だし」

「え?ええの?」

「構わんさ、どうせ暇だし…だからはい連絡先」

ふはは…次はアリシアもつれてくるぞ

「あ、ありがとう…じゃあ私も」

俺ははやてから連絡先がかかれたメモをもらう

「そんじゃあなはやて」

「うんじゃあなイクサ」

そういつて振り返って玄関から出ようとする分厚い本が目に入った瞬間

■■の書 管■人■

守護■■■■衛■■■

「うぐっ!」

消えていた記憶がよみがえる

「ちよっ!?!イクサ大丈夫!?!」

「大丈夫大丈夫、ちよいといつもの頭痛が来ただけ」

「ほんまに大丈夫なん?」

そんなに心配な顔すんなよ

「大丈夫だつてそれじゃあ今度こそまたな」

「え…あ、うんまたな」

そういつて玄関の扉を開けて玄関をでる

ーガチャ

ーボタン

そうだった八神はやては■■の書の■だ

そろそろ記憶も整理しないとなあ…毎回これじゃ無駄に心配かけるだけだな